翻刻『審訓清正実記』（四）

日本文学／教授　藤沢　毅

本紀要八～十号に引き続き、『審訓清正実記』（八戸市立図書館所蔵本。南部家旧蔵）後編巻十六～三十の翻刻をする。『審訓清正実記』の紹介、底本略書誌、凡例（翻刻の方針）については本紀要八号をご参照願いたい。なお、『審訓清正実記』の翻刻は今回を持って終了する。

【後編巻十六～三十の梗概】

岩石の城は陥落。敵将芥田は貴田孫兵衛に討たれ、熊見も蒲生勢に討たれる。小隈城の秋月胤長、胤実親子は降参する。小城の城は福島正則が攻め、小代兼房は生捕られる。清正は赤松の城攻めに向かい、赤星為行とその叔父・赤星為澄を生け捕る。為行は清正の家臣となる。

薩摩勢は新納武蔵守に千代川を守らせるが、清正と正則の勢の奮闘により新納の勢は退却を余儀なくされる。光佐上人から敵の情報を得た清正は、敵の謀計を見抜き、間道より島津義弘の籠もる鹿児島を急襲、勝利を得る。秀吉は太平寺の住職を使いにたて、義久らを降参させる。

佐々成政は謀叛を企てるが、家臣の宮田友政の訴人により露顕。成政は切腹となる。

秀吉は朝鮮出兵を決める。先陣の大将として加藤清正と小西行長が指命される。清正は行長に対し、商人の子であることを馬鹿にする発言をし、これに怒った行長は清正より先に功を立てようと、先発し釜山浦の城を乗っ取る。清正軍も上陸。開城府の城攻めには、清正の作戦が的中し勝利を得る。続いて平安道の城攻め。貴田孫兵衛や吉村吉右衛門の活躍でここも破る。忠清の城では地雷火の用意をして日本軍を待ちかまえていたが、清正はそれを読み、これを破る。

王城に向かうのに、清正軍は全羅道より、行長軍は慶尚道よりと別れて進むこととなった。行長は、役に立たない通辞を送ったり、大河を前に舟を流したりなど、部下に命じて清正の邪魔をさせる。清正は人民に乱暴しないよう心掛けながら進軍、一方、行長は狼藉をなしながら進軍していった。

朝鮮国王は日本軍を恐れ、王城から逃げ出す。二人の皇子は兀哈喰に落ちていくところを、北嶺の流人が捕らえ清正に差し出す。清正は二人を丁重に保護する。

燕丹の城攻めに、貴田孫兵衛が討死する。清正は知略を使い、燕丹の城を落とし、兀哈喰に向かう。兀哈喰に居た国王は忠清道へ落ちていく。清正は清州にて、四道将軍の一人である桂留主を謀計を用い生け捕る。

行長は石田三成、浮田秀家と密謀し、明と和睦を進める。桂留主は逃げだし、江東郡の麻貴将軍の元に走る。清正はそこへ向かい、夜中に川を渡り、牛の尾に火をつけて敵陣に追い込むという作戦によって急襲。麻貴将軍を清正が討ち、また家臣の活躍で桂留主も討たれる。明の勅使に対し、清正は行長を罵倒し、また、百万の明軍は一日十万ずつ殺すと宣言する。一方、行長は、密かに秀吉に和睦の様子を虚偽を交えて報告し、朝鮮の皇子たちを解放するようにし向ける。

再び王城に向かった日本軍。清正は埋伏の兵を見破るが、黒田長政は城攻めに

苦労する。清正は工夫を凝らし、城に乗り込み、もう一人の四道将軍・牧素冠は逃亡する。

清正に帰朝命令が下る。明の使者に対して大言を吐いたこと、署名に「豊臣清正」と記したことにより、秀吉から登城不可の命令を受ける。七月十二日に大地震があり、清正は秀吉の元に駆けつける。その後、清正は不興を受けた申し開きとして、行長の敗北を日本の敗北としないための大言、また豊臣清正と署名したのは以前秀吉より子として扱われたことからであると言い、秀吉の許しを受ける。再び朝鮮への出兵を命じられた清正であったが、これが秀吉との永遠の別れになるとは後になってわかることであった。

【翻刻】

（表紙　題簽剥落）

後続清正実記第十六

熊見、芥田、勇戦の事
幷　両将を貴田、蒲生、討取る事

勇を以て戦ふ者は危く、智を以て登る者は全く事をなすとかや。

主計頭清正、岩石責の御軍鑑を蒙りて城将等が勇猛成を察し、計略を廻らし、熊見越中守、芥田悪六兵衛を本丸へ追込、壱人も余さじと攻たりしに、猶も義勇を振いて防戦せしかば、絶頂より火矢を射させて城兵を困窮せしめ、今は敵将を孤独となしければ、城兵詮方なく、『最期の一戦快くせん』と心静に酒盛し、『寄手来らば花々敷戦はん』と扣へける。

寄手は『はや城兵の落失たらん』と我勝に入らんとするを、清正大いに制して、先、備へを堅めて、敵の突出るを待ける所に、案の如く半時計も過ず、城中一時に鬨を作りければ、寄手大いに驚き、清正の察智を感じける。

斯て本丸の木戸を八文字にひらきて、大山の崩るゝ如く鬨の声を揚て、守将熊見、芥田、五百余人を左右に随へ、勢い破竹の如く、どつとおめいて討出ければ、寄手の兵卒、清正の下知に依て備へをもふけ置たれ共、必死となつたる熊見越中守が兵、面もふらず真一文字に欠（駆）いりたりければ、さしもの寄手も先勢たちまち突崩されて、四度路になる。芥田も是に続いて突入たり。名にしおふ熊見、芥田、必死の軍なれば、「相手は嫌はず向う敵を突捨になし、脇なる敵は払い捨よ」と下知をなし、群る敵中を無二無三に切て廻るに、あへて近付者もなし。寄手の三将の面々、下知をなして進ませけるに、中にも主計頭は大音揚、

「敵は小勢也といへ共、侮る事なかれ。敵は死物ぐるいの働なれば受ながし、二手に分て戦ふべし。其中を断きれ〳〵」

と、頻りに下知しければ、加藤が勢、壱人当千の兵共、得者〳〵を引提て、真丸に備へたる必死の城兵に立向ひ、中を断きらんとす。され共、城兵も死を一所と極めたる者共なれば、其勇猛にあたり難く、切先より火を出して戦いける。主計頭は猶も采配をふり立て、「備へを魚鱗になし、横鑓を入て戦へ」と励しけるにぞ、味方の勇士「心得たり」と、さつと引んとすれば、城兵は引せじと喰付たり。氏郷も手勢を励まし、二ツに断きらんとせられければ、蒲生源左衛門氏成、岡左内、小早川図書、栗生布施等、勇気を顕はし戦いけるが、城兵は清正が勢喰付たるを見て、「すはや。爰ぞ」と蒲生勢は備へを雁行になし、終に城兵の中を断切たり。熊見は蒲生勢と戦い、芥田は加藤勢と戦いたり。城将も『再び一手になるべし』と一世の勇気を顕はし戦ふといへ共、過（寡）は衆に勝ずと、備鉄湯の如くなる故に出る事能はず。然所に前田勢は是を見て、芥田、熊見が二手の勢、その切先励しければ、「なを立切て討とれ」と両勢の真中へ引わけて戦いければ、城兵は集る事能はず、所々に別れて、爰かしこにて血戦する。芥田悪六兵衛は勇を振い、飛鳥の如くに馬を走、切て廻ればいかなる甲冑も此芥田が切先にあたり難く、瓜を割が如くなりければ、是に恐れて近寄る者更になし。貴田孫兵衛是を見て、「憎き敵の有様かな。此武者討て初陣の高名に備へん」と、馬を乗出し芥田を伺ふ。芥田は必死の勇戦に相手嫌はぬ剛気なれば、孫兵衛が向うを見て、「やさしき志かな。我最期の供せよ」と、血に染たる太刀を打振つて、人まぜもせず五十余合

戦ひ、互いにおとらぬ猛士猛将、いつか勝負の別つべきやと、敵も味方も見物しける。芥田は心中大に驚き、

『此者はいかなるものにや。抑、是迄、我に対して五十余合戦ふ者なし。扨も心よき若者哉』

と思ひながら、精心を励し戦いける。時に孫兵衛声をかけ、かさに懸つて打太刀に、芥田が刀を打落したり。悪六兵衛、すかさず走入て組付たり。孫兵衛も太刀を捨、金剛力を出してもみ合しが、馬は足を立兼てたぢ〳〵とする処に、組合し手を放さず、両馬が合にどうと落、転び合、〳〵、二、三度迄はせしか共、芥田は九州一の大力量たれ共、先刻よりの戦いに精心も労れ、其上に孫兵衛は敵一倍の神授の力なれば、終に芥田を組敷たり。悪六兵衛も無念ながら動く事能はず、終に孫兵衛に討れけるが、首を取て馬引寄、ゆらりと乗、高声に呼はりけるは、

「鬼神と呼れし芥田悪六兵衛を、加藤の家臣・貴田孫兵衛宗治が討取たり」

と呼はり〳〵、清正が陣へと走りゆき、実検に備へければ、清正大いに感じ、敵の副将を討取たる事、抜群の高名なり。殊更、搦手の一番乗をなしたる事をも書のせて、感状に太刀を添へて下されける。

今度、岩石城責の砌り、敵の副将芥田何某を討取比類なき働、神妙の到也。依之、百石令レ加増之条、猶、忠勤可レ抽もの也。如レ件。

天正十五年五月　清正　判

貴田孫兵衛どの

孫兵衛、奉公初めに手柄を顕し、面目を施しける。

此時、熊見越中守は蒲生勢と戦いしが、芥田討れしと聞て、

「扨は芥田は、はや討れしか。互ひに誓ひし事は忘れず。三のちまたに待しばし」

と、独り言い、つ、味方の勢を見れば、委（悉）く討れて、今は漸々五十人には過ざりける。夫を引率して猶も進まんと大勢の中へ走いりて思ふ儘に戦いけるに、郎従も爰かしこにて討死し、今は熊見越中守壱人なれば、『此世の思ひ出に大将と差違へ死なんずるものお』と、向ふを急度見れば、蒲生飛騨守氏郷は、金の鯰の尾の甲を着し、一きは目立て見へければ、『是こそ望む大将なれ』と、真一文字に走通りて、氏郷の旗本に切入りたりしを、氏郷の小姓中野小三郎、主人の前に乗ふさがりて支へければ、熊見怒つて只一刀に切落す。蒲生源左衛門、是を見て横合より馳来つて熊見に打て懸る。越中守は夜叉の荒たる如くにて戦へば、源左衛門も難儀の体なる故、岡左内は弓追取て切て放つ矢、熊見が甲のまびさしを射砕き、頭にはつしと立たり。さしもの熊見も眼くらみて馬より下にどふと落たりしを、源左衛門「得たり」と飛おり、終に首をぞ取たりける。

斯て両人も討れければ、岩石の城の残兵をことゞく討取りければ、三将は勝鬨をあげ、各、陣所に帰り、此由言上に及びける。

秋月胤長父子、小隈退城の事

幷　清正、秋月が降参を計る事

丹波少将秀勝、蒲生飛騨守、前田肥前守利長、加藤主計頭清正の四将は勝鬨を行い、陣々に帰り、殿下へも斯と言上しける。殿下も両日の城責を御覧ありて諸将に恩賞有ける中にも、「貴田孫兵衛、初陣の勲功に敵将の芥田を討取たる事、天晴の手柄也」と御賞美のうへ、猛々緋の陣羽織を給はりける。孫兵衛は有がたく御うけ申上ける。扨又、氏郷の郎等蒲生源左衛門、岡左内、前田が郎等、山崎庄兵衛等も此度の働を御賞美、夫々の御褒美を下されける。氏郷は当城の責衆を乞て身命をなげ打ての働きを御感心まし〳〵、此時、殿下の着し給いし猛々緋の陣羽織、金の桐の御紋付たるを御手づから給はり、「当城は無双の要害たる事、出陣の已前より心にく、思ひし処に、飛騨守が軍功に依て、誅罰の事、別て御安堵たり」と御歓び限りなし。此氏郷は信長公の婿たりし故、此度別てあつく御もてなし有故に、飛騨守も面目身に余り、退出ある。

当城の落去の事は清正の方寸たりといへ共、清正は格別に思召ゆへに、さらに功の事おば仰られず。然れ共、御内々にては清正の功莫大なりと思召ける。是、杉山の御陣より城責の次第は具さに上覧ありし事なればなり。清正も又、功にほこらず、此度の事は氏郷にゆづりて、誠に寛仁の気質なりと人々も感じける。

扨、殿下仰出されけるは、「岩石城、時を移さず落去して逆賊等ことゞく誅伐せしむる上は、此所に押へを置にも及ばず。定めの如く先陣より進発すべき」旨、命ぜらる。是によつて、正則、清正、氏郷、利長の四将、即時に打立、秋月胤長

の籠りし小隈の城に押詰ける。
　秋月筑前守胤長入道宗琳、同三郎胤実父子は島津が幕下として筑前の国に縦横し、当城に籠りけるが、宗琳思ひけるは、
『今、殿下の威勢赫々として向ふ所敵なく、討所破らずといふ事なし。某が持城の岩石の城をも即時に責落し、しかのみならず一臂一翼と頼みし熊見、芥田を始め、其外くつけふの者共、委〻（悉）く討死したるを思へば、中々秀吉に敵対せん事は、蟷螂が斧を以て竜車に向ふにひとし。危く及ばざるを知つて戦ふは愚の到りなり。いまだ合戦をなさざる先に降参して家を相続の外、有べからず』
と、嫡子の三郎胤実を初め同心しける。
　此時、秀吉の先手の輩に仰付らるゝは、「秋月入道は小身なれ共、九州においては弓矢にさとき者なれば、必ずあなどりて不覚を取べからず。粉骨を尽して責らるべき」旨の御下知也。諸将「畏り候」とて、則、かしこに到り、責かゝらんと勇みける時に、清正「暫し」と止め、御前に出て申けるは、
「某、つく〴〵案を廻らし候に、秋月入道は微勢にして独立ならざる故に、島津が簇下に属したるなり。只今、其気を計り見るに、陽気味方に帰し、又、帰昧の卦にあたる秋月が年卦たれば、必定降参すべきと存候なり。依て無体に是を攻るならば、却て敵と成べし。是は彼計にもあらず。弓矢取る身の習ひなれば、ぜひなく戦をなして島津が為に精力を尽すべし。然るには小勢なり共、味方の為には大いなる患ひなり。依て味方の威を示し、攻懸る用意なす時には、かれ必ず降参すべきなり」
といふにぞ、殿下聞し召し、
「いかさまにも此利も尤なり」
と、清正が言上の旨を諸将に仰渡され、只軍威を輝し、責懸る勢ひをなしければ、秋月入道父子、殿下の先陣の剛強なるを見て、「迚も防戦叶うべからず」と、「小隈の城を捨て、古所といふ城へ退去し、秀吉の体を伺ひ、其上にて降参に及ぶべし」とて、裡道より退きける。寄手の斥候の者共、此城のていたらく、兵粮の煙りもみへず。故に此由を言上しければ、殿下「然らば落失たるべし。追討べし」と御下知ありければ、清正又々御前へ進み出て、
「是は味方の軍威を示したるに恐れて一旦退去する也。某、案るに、味方の簇色をも見ずして降らん事は本意なく存候て、一先退しかと存候なり。君にはまづ〴〵当城にいらせ給いて御休息然るべし」
と申上ければ、諸将是を聞、
「敵の明退たる城にて御休息の事は然るべからず。いかなる計略おか残し置つらんも計り難し」
と申ければ、主計頭笑つて、
「味方の武威に恐れて退し輩、いかでか計事を残さんや。其気を見る事、敵の強弱にあり。少しも恐るゝ事なし。謀計を先として戦を後にする事は軍法の第一なり。何の恐るゝ事あらんや。急ぎ御入城あり、秋月父子が降参を待せられ然るべし」
と申上ければ、殿下、元より寛濶の御気質なれば、「清正が詞、我心に叶いたり」と、則、小隈の城へ入給ふ。諸将もみな入城して巡見するに、俄に取繕し城故に塀などもかわかざる所も有ければ、清正が名察の如く、取物もとりあへず退去せしと見へて、兵粮、武具等おも打捨置たり。清正、智恵を廻らし、塀の荒びし処おば、丹後奉書の紙を以て一夜の内に張らせ、大工などを遣ふ体にて材木をならし斧の音など響かせければ、秋月がものみの者、忍びやかに此体を見て、急ぎ古所の城に帰りて申けるは、
「秀吉、小隈の城に入て塀などの上塗を致しける最中の体なり。君、御籠城の時とは雲泥の相違なり。甚、丈夫に相見得候」
と申ける。秋月入道大いに驚き、
「扨々、秀吉は凡人ならざる大将也。一夜の内に城を普請して丈夫に仕上るといふ事、万事是にて知るべし。所詮、是と敵対、攻潰されんより、いよ〴〵降るべし」
と心を決し、使者を小隈へ遣はし申入けるは、
「某、是迄兵庫頭に属し候へ共、父子の罪をゆるされ候はゞ、御味方に属し、薩州御発向の御案内仕り、忠勤を励むべし。あわれ御許容有においては、父子共小隈に伺公仕るべし」
と言上しければ、殿下一々聞し召し、諸将に宣ひけるは、

「主計頭が推察の見識高きものなり。今、秋月入道父子、降参の使節を送りし事、是に増たる大悦あらず」
とて、則、使者を御前に召出され、
「今度、胤長父子、前非を改めて降参せしむる条、神妙の到りなり。急ぎ御陣に伺公すべし」
と仰出されければ、使節も有難むねを述て退出に及びける。殿下を初め、清正の智計といゝ、推察の見の違はざるを感じ、実に神に通じたりと大に感じける。

第十七

正則、清正、赤星小城の城責の事
幷　正則、小城の城を落す事

去程に秋月が使者は立帰りて殿下の仰を述ければ、入道父子は大いによろこび、即時に小隈の城に来りければ、御目見仰付られ、殿下仰らるゝには、
「非義を改め降参せしむる条、神妙の到り也。本領安堵仰付らる条、先陣に加り、薩州の案内者たるべし」
と也。是によつて諸卒の勢い強大にして、天地も動かす威風なり。夫より殿下は洗西山に御陣をすへさせ給い、威義をしめされければ、是迄島津に属したる杉山の城井、安心院、筑紫、草野、宗像、原田、彦山の衆徒に到る迄、皆降参を乞い、其外、味方に参るもの多かりける。是より筑後国、高良山に御陣を居られ、秋月父子に御内意あり、「伊集院、新納をあざむくべし」と御暇を給はる。秋月父子、命を蒙りて肥前の国へ趣て九州の諸士に、戦国の内に従横する事、所詮、独立なし難く、島津、大友、竜造寺が幕下となりける者共、今度、殿下御下向あつて、一統に御政事を示さるゝに依て、大友、竜造寺は先達て御味方に参りたり。しかれ共、島津兵庫頭は殿下の御旨に随い奉らざる故、武略広大にかゞやかされ、御下向あるといへ共、兵庫頭は少しも恐るる事なく、我籏下の筑前、筑後、肥前、肥後の国人、領主ははや殿下の御味方に属したり。時に『赤星、小代の人々にも御味方に来るべし』と思ひ給いけるに、此人々は勇士にして名をおしむ者共なれば、殿下の御下知に随はず。殿下は此由聞しめし、
『彼所はさのみ堅城にもあらず。殊に小勢なれば何程の事やあらん。壱人の大将を遣はして落去せしめん』
と思召て、正則、清正に命じて、時日を移さず責おとすべき旨なれば、清正は赤星の城、正則は小代の城へと急ぎ行。
殿下は惣軍を押て肥後国熊本に御陣を進め給ふ。当城にて人馬を休め給いける時に、左衛門大夫正則は勇猛短気の将なれば、「時日を移さず攻落すべし」との御下知を聞て、「わづかの小城なれば、一時にふみ潰して御感に預らん」と、手勢一千余人を卒して小城の城に押寄、郎等に命じけるは、
「当城は小城なれば只一もみに破るべし。さもなきにおいては勇気なきに似たり。汝等、粉骨を尽し、すみやかに乗取るべし」
と、勇気を励して下知なしければ、正則が郎等は一騎当千の兵共なれば、「承り候」と、鉄炮を間配りし、放懸〳〵、関を作り、おめき叫んでもみ立ける。当城の主・小代下総守兼房は、九州において名誉の勇士なれば、少しも恐るゝけしきなく、士卒に下知し矢鉋を尽し防ぎければ、寄手大いに疵を蒙り、進み得ず。左衛門大夫、後陣より走来りて下知しけるは、
「当城、たとへいか程に防ぐ迚も、限りある小城なり。一もみにもみ破つて攻よ、〳〵」
と、大音に匂りける。是に気を得て、味方の死骸を飛越〳〵、無二無三にひた攻に攻たりける。城中は小勢といゝ、矢玉限りなく打尽しければ、今は防ぐ事叶わず。下総守勇なりといへ共、今は詮方なくこそ見へにける。時に下総守兼房は士卒等に向ひ、「所詮見苦敷死をせんより、いさぎよく突出て討死せん」と、三百余人、鉾矢形に備へて、大軍の中へやにはに走いり、死物狂いに切て廻る。正則は小踊して、
「城兵打出たり。引包んで壱人も余さず打とれ」
と、もみ立て、一千余人にてくる〳〵と追取巻て、城兵をこと〴〵く討取たり。
今はよう〳〵十騎計になりければ、小代下総守、「今は死すべき時来れり」と、只壱人、阿修羅王の荒たる如く、当るを幸ひになぎ立ければ、正則が家来、大橋茂右衛門、走向つて小代に無手と組。下総守は大力量なれば、事共せず、「心得た

り」と大橋をしつかと引〆たり。茂右衛門も屈竟の者なれば、互いにもみ合しが、両人馬よりどふと落る。小代は透さず大橋を組敷ける所、長尾新兵衛走り来りて小代が揚巻をとつて引倒さんとするに、下総守は引放さんとあせる内に、大橋を押へたるひざくつろぎければ、下よりぐつとはね返し、長尾と大橋両人にて、終に小代を生捕たり。此よし殿下に言上に及ければ、御賞翫浅からず、浅野弾正少弼を以て小代下総守帰降すべき旨仰出されければ、下総守、殿下の御仁慈を感じ、帰伏なし、忠勤を尽すべき旨申上ける。是に依て助命仰付られ、本領安堵のよし仰出さる。

時に主計頭清正は、殿下の御下知を受て、左衛門大夫と引別れ、一千余人の手勢を引具し、赤松の城へと押寄せたり。主計頭、先、家臣の内を撰み、木村又蔵、貴田孫兵衛、飯田角兵衛、加藤清兵衛等の逞兵をすぐつて弐百余騎をさし添へて、ひそかに搦手へ廻し、大手よりは自ら諸勢を引卒し押寄て、鉄炮を少しうち懸させ、一声鬨を作つて、只軍威を示し、急に責懸らん共せず、備へを堅固にして扣へさせ、井上大九郎純長、斎藤立本利光を城際に遣はし、さま〴〵に匂り恥かしめ、

「城将、鼠輩の分として大軍に向ふ事は石を抱いて淵に望(臨)むが如し。今、四海、殿下の命に随ひ申さゞる者ならば、汝等、目も耳もなきやつ原かな。若、眼、耳あるならば、天命を知り、籏を巻て早く降参して城を出べし。然らば助命さすべし」

と散々に悪口する。城主赤星が一族に赤星太郎兵衛為之、是を聞て、「悪き敵の雑言かな」と大いに怒りて、従兵に下知し、「我勇気の程を見せずんば有べからず」と、既に突出んとしけるを、伯父赤星将監為澄、大いに制して、

「敵の謀事にて、悪口を吐せて憤らせ、味方を釣出さんとの計略なり。必ず突出る事なかれ。慎こそ第一也」

と押止めける内に、又も大音にて、

「臆病至極の木偶共、赤星父子ははや逃延しか。返答もせざるは大軍を恐れて穴へ入たるにや。笑へ、〳〵」

と、どつと笑い、手を打て匂りければ、血気盛んの若もの、赤星太郎兵衛、何かわ以て堪ゆべき、鑓を捻つて獅々の怒りをなし、「いでや手並をみせんず」と、真先に馬を乗出しければ、逞兵弐百余人、是に随い、むら〳〵立たる寄手の中へ無二無三にかけ入れば、寄手は大いに突立られ、散々に敗走する。赤星怒つて、

「言葉にも似ざるうづ虫ばら、壱人も余さず追かけて打とれ」

と呼はりける。中にも井上大九郎は小戻りして赤星と戦いけるが、亦、敗して逃て行。横合より斎藤立本、鑓を以て支へたり。赤星は「面倒なり」と、一声猛つて突立しかば、立本逃行を太郎兵衛、敵の謀事ならんを打忘れ、「遁さじ、やらじ」と追かけしが、急度心付たりけん、「永追して、跡を立きらるゝな」と引返し、城へ引いらんとする処へ、主計頭清正は十文字の鑓をひねり、追かけ来り、「比興なり、赤星。加藤主計頭、是にあり。見参せん」と「引かへして勝負あれ」と呼はり〳〵追かけければ、太郎兵衛も血気の若ものなれば、『少しもゆふよすべきや』と、返答もせず馬を返し、清正に突て懸りける。主計頭は少しあしらい、三十余合ぞ戦いける。

清正、赤星父子を生捕る事

幷　赤星太郎兵衛、清正が臣と成事

主計頭は城将の心を察して、郎従に命じて謀計を行はせ、なんなく太郎兵衛を城下へおびき出し、みづからも鑓を以つて渡り合、暫くあしらい居けるが、太郎兵衛は先刻よりの合戦に身体労れ、清正は精心をはげまし戦いけるゆへに、赤星は下鑓になり鑓法乱れ、既に危く見へける処に、赤星が士卒等大いにうろたへ馳来り、

「寄手の大軍、搦手より不意に打いり、城ははや乗とられたり」

と告ければ、太郎兵衛驚き、「すは一大事なり」と、清正をふり捨て引かへさんとする所を、清正俄に追かけ討とらんとするを、赤星が従兵等、爰かしこに踏止り支ゆるといへ共、元より気を失いし事なれば、或は討れ、又は生捕れ、漸々十騎計残りける。此間に赤星は城門に走付て、「門を開け」と呼はりけるに、はや清正が後陣の勢、城中に満々たりければ、太郎兵衛大いに驚き忙然たる時に、城中よりは鉄炮を打かけながら大いに笑い、

「当城には汝が輩を置べき所なし。早くいづ方へなり共、走るべし」
と、声々に呼はりければ、太郎兵衛、無念の歯がみをなしけれ共、詮方なく城をにらんで立たる所に、主計頭は追欠来り、
「我謀事を以て汝が帰るべき城を乗取たり。はや巣穴はなきなり。急ぎ降るべし」
といゝつゝ、赤星を八方より取囲んでければ、太郎兵衛、「今は最期」と思い定めて、
「清正と勝負を決し、快く討死せん」と、鑓なげ捨、太刀を抜て主計頭に討て懸る。
清正は、『渠は武勇のものなれば、生捕て家来にせん』と思ひければ、あしらいて戦いけるが、透を見て太郎兵衛が乗たる馬のむながいのあたりをしたゝかに突けるに、馬は頻りに立上りければ、太郎兵衛は馬上にたまり兼、真逆さまに落たりけり。井上、斎藤、おり重り、終に縄をぞかけたりける。
夫より主計頭は木戸を開き、城中に入ければ、木村、飯田、貴田が輩、将監を生捕にして引居へけり。清正は赤星太郎兵衛を引出させ、父子に向ひいんぎんに礼をなし、
「某、御辺等父子の英勇たるをかんじ、兼てこんもふに思ふゆへ、奇計を以て当城を乗とらせたれ共、更に勇士の本意に非ず。此度、殿下九州御下向あつて、天下一統の政事を示し給ふ事は、剣げきを用いず、万民の安堵を思召事ゆへなれば、帰降の人々はみな本領安堵なさしめらる。去に依て、我行う間敷謀計を以て貴将達をとりことせし事も、赤星の家断絶なからしめん事を思ひ、斯の如く計い申候也。今は貴将達も我意を止られ、殿下に髄身し給はゞ、本領安堵有べし。又、島津家、武威につのりて、殿下にそむき合戦せらるゝ事、天命に背き給ふにひとし。殿下は勅命に依て下向あれば、是に敵する者は逆賊也。是等の事は我等演説するに及ばずといへ共、義理に違ふ事も時としてなきにも非ず。依て、貴将に述る也。早く島津と義絶して、一天の君に随ひ給へ。我等とても、忝も勅諚を首に頂き、御辺達の如き勇猛の将をも心易く生捕る事は、是全く勅の重きによつてなり。殊更、其家をやみ〳〵と亡び失なん事、本意なく存候。ゆへに、斯計らいしなり。すみやかに憤りを晴し、惑をとらしめて帰伏あるべし。清正、宜敷相計い申べし」
と、理非明白に利解しければ、赤星父子、赤面して清正の仁慈を感じ、落涙に及びけるが、漸有て詞を正し申しけるは、
「我々籠城せし事は、あながち島津が好身を存ての事に非ず。此度、島津勢、我々を本国に帰し候所、御覧の如く某父子小身なれば、詮方なく当城に籠りし処也。一旦は勇猛を顕はし戦いし事は、島津に笑はれん事を恥て殿下に敵対申せし也。其罪暫しといへ共、重かるべきに、御仁慈を以て忝なき御教に預り、近頃以て恥敷存るなり。某は老年に及び候へ共、倅はものゝ役にも立べきやと存候へば、貴君に仕へさせ、父子が助命の恩を謝し申さんと存る也。何卒御許容あらば忝」
と申ける。清正は大いに悦びて、
「先々我寸志を承引の段、身に取て大慶せり。先、殿下へ御目見有べし」
と、両人を伴い熊本の城へと急ぎ、斯と言上に及びける。
私曰、将監は子なし。依て太郎兵衛は甥なれ共、養いて猶子の如くなり。後には子とせり。此事、長ければ爰に略す。
殿下聞し召て、則、赤星父子を召出され、
「汝等、帰伏する事、神妙也。我、汝が持城を責る事、私に非ず。勅定によつて九州一統平均の為なり。是より忠節を抽んでべし」
とて、即時に本領安堵の御教書を給いける。「太郎兵衛事は願いに任せて、此度の恩賞にかへ、主計頭召仕ふべし」と上意有ければ、清正大いに悦び、太郎兵衛を我郎等になしければ、無二の忠臣とは成たり。是、偏に清正が仁慈の厚きに依て無事に治り、赤星父子が幸とは成ける。
扨亦、紀州には敵の枝葉なきに依て、薩摩の国へ乱入あらんとて、佐渡より御船に召れ、薩州の出水へ発向ある。時に日向口へ向いし大和大納言秀長公、毛利中将輝元、吉川、小早川、宇喜多、黒田、毛利、蜂須賀、南条、小鴨、善祥坊等は、日向の高城を取囲み、島津が援兵の来るを支へんと備へける。中にも肥後、肥前の大小名は委（悉）く先陣に加はりける。薩州の幕下・新納武蔵守、伊集院九郎左衛門尉等も彼国に居たりしか共、足を止難く、大江迄引退けるよし、薩州へ注進しければ、兵庫頭義久、嫡子又七郎義弘等、是を聞て、「鹿児島の城こそ大事な

り」と一同に評儀して、「本城にて敵を防がん」と、其用意をなしける。
高城にては、鹿児島の援兵来らざれば、敵の大軍を見て、「中々防戦叶うべからず」と（衍字ママ）といふ。時に島津中務少輔家久申けるは、
「上方勢、大軍を以て当城を取囲む。今、鹿児島に援兵を乞ふといへ共、来らず。益なく加勢もなきに、爰に時日を移すならば攻潰されん事、眼前也。我、謀計を以て降参し、秀吉を欺き、再び本国へ帰るべき也。此計略如何あらん。おの〳〵一決あらば計るべし」
と有ければ、諸将も「此事然るべし」といふ。家久、則、使者を以て秀吉の陣へ降参の旨を申送りて、「城を明渡し、薩州へ御案内仕るべし」と申入ければ、秀長、諸将に相談有ければ、人々「然るべし」と申に決定し、則、許容ある故、家久初め三原弾正、山田新助等、城を開きて殿下の御味方と成にける。

第十八

薩州勢、千代川出張の事
幷　主計頭、敵勢を見積る事

自己の謀計は一旦にして武威をなし、天命の謀計は始終是をほつすとかや。
島津父子、猛威盛んにして九州を動かし、向ふ所敵なく、勢は旭の如くなりけれ共、殿下勅命を以て九州に下向ありしかば、今迄島津に随ひし大小名、戦はずして降る者、日々増長し、既に島津ばかり残りけるに依て、出城の人々は鹿児島に帰入し、諸将を集めて軍儀をなす。島津征久、町田久信、伊集院忠棟等申けるは、
「肥前、肥後の弱将共、皆反心して秀吉に合体しけるゆへ、かれが威勢強太なり。先、武蔵守が堅めたる千代川に加勢を遣はし、彼所にて一旦防ぐべし。若、千代川破れなば、鹿児島にて防戦すべし」
と申ければ、各一同に決定し、義久は鹿児島に止まり、義弘は数万の軍勢を卒して出張しける。本城を放る、事、凡三里にして備へを立、「千代川の様子を見て謀計をなすべし」と用意あり。島津勢には右馬頭征久、左衛門尉俊久、伊集院太郎左衛門尉忠棟、平田美濃守実遠等を始として三万余人、千代川を前に当て新納が軍勢を助けける。伊集院、新納が陣へ味方の謀計をしらせければ、悦喜して、猶又、我所存をもひそかに申遣し、「両条の内にては、何れ敵を破らざる事は有べからず」と、手ぐすね引て待かけたり。
殿下には紀州佐藤より雷発ありて、薩州の出水へ着船まし〳〵、是より直に千代川へ押詰給ふ所に、先手の足軽等立帰り、
「敵兵は千代川を前に当て備へを堅め、また、川の砦にも大軍にて備へ候也」
と言上す。殿下聞し召れ、
「然らば是より海陸二手に別れて進むべし」
と、御手わけある。先、陸道より進む人々には、加藤主計頭、蒲生飛騨守氏郷、左衛門大夫正則、前田肥前守利長、佐々陸奥守成政、小西摂津守行長、池田三左衛門尉輝政、筒井伊賀守貞次、堀左衛門督秀政を始として、其外諸将余多進発ある。扨亦、船手よりは加藤左馬介嘉明、脇坂中務少輔安治、九鬼大隅守嘉隆等、数万の兵船を浮めておし向ふ。惣軍海陸かけて弐十三万余騎、千代川に押寄、敵を去る事廿余町にして備へを立、猶も敵陣を伺はせけるに、島津勢は川のあなたに厳敷備へ、合戦を専らにせんと見へにける。殿下は良将に渡らせ給へば、即時に主計頭清正をめされ、
「尋常の者にては敵の実否を知る事能はず。汝、ものみをなして見切来るべし」
と仰らる、。清正畏つて、木村又蔵、貴田孫兵衛をめしつれ、ひそかに千代川のこなたなる小高き所に登り、新納武蔵守が備への体をよく〳〵見積りけるに、
「両勢にて三万余騎計、新納が陣は背水の陣也。此備へは、味方の気を知らざる時は決して勝利の体にて、別に思慮もなき事と見切たり。併、此合戦、味方みだりに攻懸るならば、敵の図に入べし。敵の動勢を能計りて戦ふ時には大いに理あり」
と、本陣に乗帰りて言上なし、其所存を具に申上て、
「今少し御旗本を進められて然るべし」
と申にぞ、殿下にも尤に思召けるにや、諸将に令して次第〳〵に進ませらる、程に、其間十町計にて、又陣をすへて殿下にも御旗本をすへ給ふ。時に主計頭言上しけるは、

「新納、背水の陣をもふけしは、只、御旗本に切いらんとの為也。某、是を考へるに、御旗本を進められて敵の見安き処に御旗を立られ然るべし」
と申ければ、殿下にも其思召にてすゝみ給ふなれば、打うなづかせ給いて、態と敵の見安き処にたて給ふ。
　時に薩州の新納武蔵守は、寄手の次第に進むを見て、待もふけたる事なれば、笑をふくみ居けるが、其間十町余りにして陣をすへ動かざれば、武蔵守案に相違して、
「扨は我謀計を悟りたると覚へたり。上方の弱敵等に我国の勇烈をしらしめて肝を消させ、其虚にのりて旗本に切いらん」
と、手勢千五百人を随へ、伊勢兵部少輔貞通、松尾隼人正成景、川上造酒之介、種が島弾正正武等に謀事を通じ、其身は真先に進んで先陣に突懸る。是、筒井伊賀守が備也。筒井は元来勇功の者なれば、手勢に下知して戦ふといへ共、武蔵守は鉄にて八角にうつたる棒の八尺にして、先に四方錐の如くなるとがりたるが、長さ壱尺五寸、重さは十貫め有けるを持て、突立〳〵たゝき立ければ、筒井が勇兵、此鉄の棒に進む事能はず。漂ふ処を「心得たり」と無体に突懸りければ、今は一支もならず、後陣の方へ敗走しける。武蔵守、此敵に目も懸ず、大将の旗本を目懸しゆへ、先へ〳〵と進みける。次備へには小西摂津守行長、手勢を励ましし、新納をさへぎらんと突懸るを、「もの〳〵しや」と武蔵守は従卒共に勇烈なれば、四方八方を打立ける故に、行長が兵も色めく処を、「さも有べし」と、薩摩勢の中より、別て新納、例の鉄の棒を雷光の如くひらめかし、当るを幸になぎ廻る程に、小西が兵共、余りに強く討立られ、四方へばつと散乱す。行長大いに怒つて、采配をちぎるゝ計に振立て、「懸れ〳〵」と下知なしければ、漸々と五、六騎取て返しければ、その身も采配を釼におさめ、武蔵守に切て懸れば、新納は鉄の棒を振立、大喝一声「みぢんになれ」と打ければ、小西が郎等木戸伝蔵は人馬共に打倒され、玉子の如くみぢんに砕て死だりけり。小西が兵は是を見て、舌を巻て馬を返して敗北する。新納は是に目も懸ず、次の備へに切かゝらんとぞ扣へける。

九州勢、新納と接戦の事

幷　加藤清正、福島正則等、勇戦の事

　扨も新納武蔵守忠基は最初の術の如く、殿下の御陣へ切いらんと思ひ、且、上方勢と初めての戦いなれば、『一代の勇壮を顕し、薩摩勢の手並をしらせん』となぎ立〳〵馳廻る。其有様、猛虎の群羊の中を走るに等しく、是に向ふ者、命を失ふ者少からず。たま〳〵助る者も脚腰を打れて働く事ならず。実にや島津が先勢、九州一の剛傑なりとぞ見へにける。殿下は新納が働を御覧じて、先手に御下知有けるは、
「敵将の勇猛あたるべからず。然れ共、遠き慮なし。先手を一勢〳〵に引わけ、諸軍の混雑なき様にすみやかに戦ふべし」
と有ければ、忽ち一勢〳〵に引別れて備へたり。殿下の軍配は自の手足を遣ふが如くの軍配なれば、斯る乱れし中にても忽ちにその下知の行届事、奇々妙々なり。薩摩勢は人気すこやかにして、匹夫下郎に到る迄、励敷事、他国に越たり。まして第一の家臣・新納武蔵守忠基なり。士卒迄もみな是に等敷者なれば、上方勢の雲霞の如くなるも、少しも恐るゝ体なく進みける。
　爰に先頃降参したる秋月長門守胤長入道、
「降参の手始なれば、一合戦して呉ん」
と、先に進みしか共、新納は少しも凝気せず、大の眼を怒らし、
「昨日は味方にあり、けふは敵になつて我に刃向ふ反賊。いで物みせん」
と、鉄棒をりう〳〵と打ふりて飛懸る。秋月入道は手勢に下知し、
「引包んで討てとれ」
と、頻りに進みける。新納はから〳〵と打笑い、
「壱人づゝは手間ついへなり」
と、五人六人打倒し〳〵ければ、秋月が勢もたまらず散乱せり。竜造寺山城守政家は是を見て、
「島津は我家代々の怨敵たれば、討取て憤りを晴さん」
と、おめいて突てかゝる。忠基は少しも恐るゝ気色なく、田虫の群る中を走廻る如くなぎ廻る程に、両家の士卒多く討れ引退く。跡に扣へし筑紫上野介広門、

松浦式部卿鎮信入道、太田飛騨守政長等、都て九州降参の面々、入替りて戦い新手を以て討とらんと働きけれ共、武蔵守少しも屈せず、勇猛次第に増長し、鉄棒は湯になれと車輪の如く打ふり〳〵、力量のかぎりを打立れば、筑紫、松浦、太田が輩、散々にもみ立られ、八方に乱れたり。

斯る所に福島左衛門大夫正則は、最前よりの戦いを伺い居けるが、味方の崩るゝを見て、

「しや、もの〳〵しき敵の振廻かな。武蔵守とて鬼神にもあらず。島津が家臣の人間也。我勇剛の程を見すべし」

と、馬を真先に乗出して、我手の者共に申けるは、

「今日の合戦は自余の敵と思ふべからず。島津家は勇猛の者多し。かれが鼻をひしいで呉ん」

と、短兵急に進みける。主計頭清正も是を見て、

「正則が進しこそ幸也。敵の鉾先をくぢくは此時也」

と、士卒に命じ、新納が兵を中に取込んで討んとする。武蔵守忠基、是を見て、

「此敵は上方の勇兵と見ゆるぞ。麁忽の働きすべからず」

と、手勢を分て戦はんとする所に正則は、其気質烈火の如くなれば、「我先に懸らん」と、真しぐらに打て懸り、一もみにかけ散さんとしける。清正はつむじ風の発する如く討て懸る。新納は数度の軍になれたる者なれば、清正が兵に懸向ひ、討破らんとしけれ共、清正が兵、おの〳〵不双の手だれなれば、敵中に走入りて鑓を以て突立〳〵欠破る所に、新納が勢、是を欠ちらす事能はず、数十人討れければ、既に乱れんとする。武蔵守是を見て、「すはや、大変也」と、正則を捨て清正が勢にかゝらんとすれ共、正則、是をはなさず必死と喰付たり。新納怒つて此手を是非〳〵打破らんとする内に、清正が手にて討るゝもの多かりける。薩摩勢は心はやたけにはやれ共、両段に受たる事なれば、すくふ事も助くる事もならず、既に惣崩れとなる。時に種島弾正正武、川上造酒之介、松尾隼人正、伊勢兵部太輔、壱万五千の新手を以て武蔵守を救はんと松尾、川上は加藤に渡り合、伊集院、種島は正則に懸合て戦ふ内に、新納は勢をまとめて浜辺をさして引退き、暫く人馬の息を休めける。跡には加藤、福島の両勢、島津の四将壱万五千の荒手、味方は五千計の勢と入乱れて火花をちらして戦いける。加藤、福島は豊臣家の勇猛の将なれば、従う士卒も是に習いて柔弱の者はなく、おの〳〵血戦す。薩州勢も新納が手痛き働なれば、「にぶき戦いして後日に笑はれな」と、火水になつて戦いける。殿下ははるかに是を御覧じ、先陣の兵は鶴翼に備へ、しづ〳〵と押出し給ふ故に正則、清正は頭となつて勢いを得て戦いけるによつて、薩摩勢、よはきには非ざれ共、忽ち鑓場一、二丁計追立られたり。四人の大将は声々に「爰を逃て何国にて戦ふべき。引な〳〵」と下知するといへ共、崩れ立たるならいにて、再び守り返す事能はず、亦一町計追立られける。時に四将はおの〳〵鑓をとつて勢いかゝる敵中に乗いりければ、残る兵も是に勢を得て再び追返して戦ふにぞ、双方牛角の戦いにて、山河も一時に崩るゝ如く、砂煙りは天を覆いて白昼かへつて夜の如く也。河のこなたに扣へたる伊集院、新納は河を渡りて向ふを見れば、秀吉の旗本働き出し、鶴翼に備へたり。『是に味方を包むものならば由々敷大事也』と思ひ、『軍を引揚ん』と、ばら〳〵と乗出しければ、正則、清正は鑓を打敷せて扣へたれば、双方物はかれとぞ成にける。是、加藤も福島も小勢なればなり。伊集院も鉦をならし人数を引揚たり。四将も浜辺に引退て新納、伊集院と一手になり、暫く人馬の息を休めける。伊集院申けるは、

「今日、各〳〵の苦戦感るに余りあり。併ながら此所にて戦いたり共、利有べからず。敵の勢は殊の外強。無益の軍せんより、川を越て謀事を廻らし、敵の鉾先をくぢくべし」

と申ければ、武蔵守、

「某も左様にこそ存る也。死地において大軍を引請、数刻の軍せし事は、当家の弓矢の猛なるをしらせ申さん為也。所詮、秀吉が旗本へ切いらん事、成べからず。此上は謀略こそ肝要たり。然しながら、此儘に川を越ならば、敵、跡をしとふべし。一同に川を越ん事は然るべからず。某が兵士、はや労れを休めたれば、後殿を勤むべし。各は静に川を渡さるべし」

と申ければ、伊集院申けるは、

「貴将の詞、尤の事也。しかし、某が兵は少しといへ共、荒手なれば、今日の後殿は某にゆづるべし」

と申つゝ、「労れたる兵より川を渡し給へ」とて、先、川上、松尾、伊勢の人数を渡し、伊集院、種島、新納が勢を渡す内に、伊集院は浜辺に備へを堅めて、「上方勢がしたい来らば討散さん」と扣へたる処に、はや上方勢押来る。先、荒手を以て是を防がんと鉄炮を折敷て待かけたり。

寄手の先陣加藤主計頭は、敵は川を渡して退く由を聞て、「追討せん」とて、備へをまばらに千代川に来りてみれば、浜辺に伊集院が兵士、備へをもふけて敵を待体なりければ、清正、爰にて備へを立直し、先、伊集院が備に向いて戦を始めける。

第十九

清正謀略、伊集院、種島を破る事

幷　新納武蔵守勇戦の事

伊集院九郎左衛門尉忠棟は、味方を救いて四将を川向ふへ引せんと一組を渡し、新納と談合して、伊集院新手なれば後殿して敵を防がんと、川端に備へ待所に、主計頭清正、一番に追かけ来り、やにはに伊集院に討て懸る。加藤が郎等木村又蔵、森本義太夫、飯田、赤星、貴田、古橋、斎藤、井上、吉村等、主人の下知によつて、みな歩行立にて、兵卒に紛れて弐人づゝ組合て、雑兵共に先に進んで鬨を作りて討てかゝる。清正、諸卒を進め励し、無二無三に馳立る。島津勢も馬武者を先に立、加藤が歩行武者をかけ立、蹄にかけんと精力を尽して進みける程に、加藤方、兼て工みし事なれば、歩行立の勇士等、態と四方に散乱しければ、島津勢は加藤が謀計とはいざしらず、勝に乗て突て入。元来、彼勇士原を雑兵と心得て、旗本を目懸て面もふらず進む。時に、彼加藤家の者共、二人づゝ組合て、島津が馬武者の中へ難なく紛れ入、持たる太刀にて馬の足、或は太股を突ければ、馬は倒れ、乗人は落さるゝ所を、押へて首をかく事、数十人なり。猶も勇士等懸廻り〳〵、手痛く働き、敵と見るやいなや右の通りに致しける故、初の程は敵も心付ざれ共、爰かしこにてかよふしる故に、「すはや」と目を付て彼者共を討んとすれ共、名誉の者共なれば、爰に顕れかしこに隠れ、馬より先に馳廻る程に、島津勢、雑兵と思ひの外、彼らが為に討るゝ者、数をしらず。伊集院が三千の兵、忽崩れ、足元に敵有かとあやぶみ、戦い得ずして乱れ立。

清正は是を見て、「時分はよし」と諸卒に下知して、「かゝれ〳〵」と、逞兵弐千余人、雷の落懸る如く、おめき叫んで四角八面にあたりて蹴立、踏立、勢いに乗じて揉たりしかば、伊集院大いに乱れ立て敗走す。種が島は是を見て、兵を引て横合より殺到し、味方を救ひ戦いければ、伊集院是に力を得て、忽ち一所に成て加藤勢を討ちらさんと戦いたり。清正、是を見て、「此剛兵、容易に破らん事あとふまじ」と、種々手を尽してぞ戦ふたり。

時に、正則は浜辺の戦ひあると聞て、「先鋒を主計頭にせられんは無念の事なり。我、馳向つて打破り、彼より先に越んもの」と、手勢三千計にて馳来りけるに、戦いまつ最中なれば、是に気を得て、薩摩勢に面もふらず一文字に突懸りて、自ら朱柄の鑓を以てやにはに馬武者三騎を突落したり。郎従共も主人におとらじと勇気を顕はしたりける故、流石の薩州勢も加藤一手さへあるに、正則が新手に当り難く、いよ〳〵乱れ立んとする時に、新納武蔵守は十分に息を入、英気をやしないける故に、乱るゝ味方を左に引せて、右の方より福島が勢に、例の鉄の棒を打ふり〳〵前後左右の差別なくなぎ廻りければ、正則が勢、勇なりといへ共、其備へしらけたりければ、武蔵守は清正が勢に突いらんとする。正則は備へのしらみしを怒つて、猶も新納が兵を喰留んと支へたり。武蔵守は獅子奮迅の荒れたる如く、又、左衛門太夫が勢と大いに戦ふ。加藤は伊集院、種島の兵、ひとつに成ければ、「先、此敵を打破らん。然る時には残兵全たからじ」と、味方に下知して短兵急に責立ければ、伊集院、種島も暫しが程は戦いしか共、最初の戦いに困りしゆへ、叶い難く、只一もみに揉立られ、河原表へ敗走しける。清正、「すはや、此時なり」と、采配を打ふり〳〵攻立ければ、郎等共、「一世の勇戦爰にあり」と火急に出し詰ければ、薩州勢は返し合す事能はず、京泊りの渡しをさして逃行。中にも伊集院九郎左衛門尉は只壱騎乗かへし〳〵、追来る敵をまくり立たり。伊集院が兵共、五、六十人、主人を討せじと同じく返し合、爰を詮度と戦ふたり。薩摩勢の中にも夏目権左衛門、前田新左衛門の両人は勇を顕はして七、八騎を切て落し、手を尽し戦ふ内に、忠棟を初め、残兵は虎口を引退きたり。夏目、前田の両人は勇を振いて井上大九郎と戦い、終に前田は大九郎、討取たり。貴田

孫兵衛は夏目と戦い、是も夏目が首を得たり。清正は勇みをなし、川を越んとする所に、新納と正則が戦いに、流石の正則も突破られて、少し漂ふ体なれば、清正是を救はんと川を越さず、大返しに備へを廻はして新納が手へと向ひける。

加藤、新納と接戦の事
幷　薩兵敗北の事

斯て左衛門太夫正則は、武蔵守忠基と血戦するといへ共、既に手負、死人多く、乱れんとしければ、武蔵守は大いに怒り、大返しに取て返し、味方を励まし、正則が勢を打立ければ、正則が勢も名にしおふ剛兵なれば、武蔵守を追とり込て四方へうつて懸るといへ共、武蔵守は少しも恐れず、東西にはせ通し、南北に払い、飛鳥の如く働きければ、左衛門太夫、是を見て、

「やさ敷敵の働きかな。かゝる武勇の者を討取てこそ天下に名を輝かすべき也。我、討取て呉ん」

と、大身の鑓を打振つて突懸りければ、武蔵守、につこと笑い、

「上方童共がしおら敷有様かな」

と匂りながら突合、二、三合戦いける。時に伊集院、種島は清正が勢いに追立られて敗走し、追討にせらるべき体なれば、正則を振捨て、馬を引返しければ、左衛門太夫は大音に、

「勝負の花を見捨るや。我鑓先に恐れたるや」

と、跡より諸鐙を入て追欠たり。薩兵は是を見て、「すはや、新納も敗する」と心得て、種が島は引返し、追来る勢を支へんと自ら持たる鉄炮を切て放せば、あやまたず福島が馬の胸懸のあたりを打抜たりければ、正則は真逆さまに落たりけれ共、さそくの正則、中途にてひらり返りて折立けり。上方勢は正則を討せじと主人を囲ひ、後陣の方へ引返しける。是によつて残兵大いに図を失ひ、薩兵は息もつぎあへず福島勢を追まくりたり。主計頭ははるかに是を見て、「すわや、正則、敗北す。是を救はずんば有べからず」と、新納が勢にくひ付たり。新納は福島おば種が島に渡し、其身は引返して清正が旗本に突懸る。清正「得たり、かしこし。望む所の敵なり」と、少しも屈せず、千変万化して戦ふたり。扨、福島は歩行立になりけるゆへ、後陣に入て乗替の馬に打乗て、再び進み来り、種島が勢と鑓を合して犇々とくひ付たり。新納は正則を捨て清正と戦い、追つ返しつ七、八度、十度、廿度押合突合、その有さま、いつはつべき共見へず。頃は五月十三日の炎天に、汗は流れ鎧をひたし、討死の死骸は山の如く、さしも広き千代川は血汐流れて時知らぬ紅葉の如く、日も西山に傾きけれ共、互いに引上べき汐合なし。清正は急度思案し、

『今宵の夜軍ともなるならば、味方は不知案内なれば大いに損失あり。軍を収るにしくはなし』

と、自ら真先に乗出し、つばなの穂先を並べたる如き鑓場を事もなげに馬をはせながら大音に、

「いかに、島津家の新納殿に申さんは、戦い、今日のみにも限るべからず。日も夕陽に及びぬれば、相互に鉦をならして軍を収んと存るなり。併しながら、是迄見参せざれば、士卒の戦いを止めて御辺とはな〳〵敷勝負せん。望みに任せ給はゞ、とく見参すべし。斯、申は、兼て聞及び給ふらん。殿下の御内において先陣に命ぜられし加藤主計頭、藤原の清正也」

と、天へも響く大音にて、呼はり〳〵乗いりければ、勇猛烈火の如き武蔵守、斯、敵に声を懸られし事なれば、何かは以て猶予すべき、棒打ふつて陣頭に走出し、

「上方の先鋒の将、神妙の所望なり。いでや勝負せん」

といふより早く、鉄棒を打あげて、みぢんになさんと立向ふ。清正「心得たり」と引外し、鑓にて突んとする。武蔵守は打損じたるを無念に思ひ、加藤が鑓を払いのけて戦ふ有様、九州一の剛将と関東一の猛将と呼れし人の争いなれば、互いに知つたる秘術を顕はし戦いしは、人間業とは見へざりける。凡、戦ふ事、五十余合なりけれ共、更に勝負は分らず。武蔵守思ひけるは、

『是迄、我鉄棒に三合とあたる者なし。今、加藤が如き鑓法の術を顕はす事、希代の曲者なり。是、日本不双也』

と感心してける。清正も又思ひらく、

『誠に武蔵守が所為は、聞しにまさりし武辺なり』

と、互いに感じ合つゝ、猶も勝負をいどみける。武蔵守は、

『たとへ清正勇なりといふ共、我鉄棒には逃すべからず』
と、手を砕きて透をあらせず、付打に打合けるが、或は横になぐり、勢いこんで打といへ共、加藤は少しも鑓法を乱さず。時に新納は気をいらちて、かさに懸つて打時に、加藤はひらりと馬を飛しければ、新納は馬に余されて横さまに倒れたり。武蔵守は厚鉄の鎧を着たる上に、十六貫目の鉄の棒を持しゆへに、飛おりる事能はず。清正、「得たり」と、鑓おつ取述て下突にせんとせしが、
『いや〳〵、斯る勇士を無下に殺さん事、本意なし。助け置ならば、味方に属するの後は一方の防となるべし』
と思ひ、馬を走よせて、
「いかに、武蔵守。今、汝を突ん事、安しといへ共、勇士、鉾を争ふに、其失を幸いにする事は未練の到り也。一先退きて、馬を乗かへ、快よく再び勝負を決せん」
と、馬を乗戻して扣へ居たりければ、武蔵守は起上り、
「扨も〳〵、清正は若年ながらも誠に仁義の将。我、項羽が勇あり共、いかでか此人に敵すべき」
と、大いに感嘆し、味方の陣へ退きける。「誠に清正は古今珍ら敷勇将なり」と、後々迄も称美せしとなり。
正則は種島と揉合けるが、弾正が兵はもみ立られ、岸に添て敗走しける。早、日も暮ければ、合戦は是迄なりと、正則、清正、一手となり、兵をまとめ、我陣へ退きける。此時、秀吉公、両人を召されて、
「今日の働き、今に始めざる事ながら、別して感ずるに余りあり」
と、大いに賞美し給いける。
去程に、薩州の諸勢、千代川の一戦に利を失い、其夜の内に川を渡して三里退きて陣を取、此事、逐一本城へ注進しければ、兵庫頭義弘等の輩、こと〴〵く諸将を集め、評義しけるは、
「新納、伊集院、種島等、千代川を破られ退きし由。然れば、上方勢、鹿児島へ押来るべし。然る時は兼て設置し謀事を以て破るべし」
と、委（悉）く令し、また〳〵新納、伊集院等へも此事を告しらせける。此計略と申は、
千代川の下手、京泊り、此所は薩州一の湊にて、一国の輩、此所より出船の所也。鹿児島迄本城より十五里。其間、往還前後細道にして中路は広道也。此道を経て入る也。爰を押へる時には入事ならず。此広路の左右に多く焼草を積て焔硝硫黄の薬火をそゝぎて、上方の先手の者と戦い、態と弱く戦はせて偽引入、相図をなして左右より火を懸、上方勢をみな殺しにせんとの謀事なり。亦、左右の閑道より兵を廻し、先手の騒動する内に、秀吉の旗本に切いるべしとの謀略なり。
此謀事を武蔵守方へ申遣しければ、何れも「然るべし」と、其手当をなしける。
斯て殿下は諸将を集給いて、
「敵兵すみやかに退去せし上は、急ぎ川を渡し陣すべし」
と仰出されけるにぞ、主計頭言上しけるは、
「御諚御尤には候へ共、此大河、馬にて渡さん事も難きにあらず。然れ共、船手の面々も着陣せし上は船も多し。然るを差置て馬にて渡さん事も益なき事なり。舟橋を用いられ然るべし」
と申ければ、殿下も尤に思召、即時に舟手の面々に御下知あり、舟橋を懸渡しける。夫より道あしき処は道を造らせなどして馳させ給いける程に、心安く通行あり。二里半程行て御下知あつて、此所に御陣所をすへさせられんと土居を築き、柵をふり、簇、馬印を立ならべて厳重に陣営をなしたり。諸軍は京泊り迄の間、三里余りが間に思い〳〵に陣をとつたり。

第弐十

光佐上人、閑道より退去の事
幷　平野、粕谷、案内の事

去程に、殿下、千代川の軍に勝利を得給い、敵勢に追すごふて京泊りの湊に着し給い、陣営を堅め、船手の面々は海上に数千の船を並べ、海陸の往来を自由になし、惣勢弐十七万八千余人とぞ聞へける。殿下の御本陣は太平寺といふに入御

まし〳〵、清正を召され仰られけるは、
「さばかり勇武の薩摩勢、我大軍おも恐れず相働らく事、兼て聞及びたるより感心せり。殊に当国は日本の果なり。外国に等しければ普通の案内を知たる者なし。いかなる謀略おかもふけ置しも計難し。然れば、即時に踏潰す事、叶い難し。疎略に乱入し征伐の功なき時は、大軍を労せしかいもなく残念の事也。汝ら、心を責て謀計をなすべし」
と仰出されければ、主計頭清正謹んで、
「御諚の趣、畏り奉り候。君の御計策、孫呉をも欺く御大将にてわたらせ給ひ、水晶の塵をはらい、明徳をあきらかにして終を慎み給ふ故なり。去ながら、君、遠き御謀事を廻らされ、去年、光佐上人を御頼ありて密計を示しおかれ、平野長泰、粕谷内膳正、其外御旗本の面々を差添られ、当国へ下し給ひし事なれば、君、当国に御着陣の事を知らざる事は有べからず。粕谷、平野等にも御計略の一条言上すべき旨もあらん。某、つく〴〵案るに、九州一統、戦国とは申ながら、当国は軍なく、他家より当国へ攻いりし事はいまだなしと存候。みな他国を落すのみにして、当国は静謐なれば平野、粕谷、決して国の大体を覚語仕らずといふ事有べからず。何れにもかれらが便りを待せられ然るべし。御諚の如く、うかと乱入の事は然るべからず」
と言上しければ、殿下にも尤に思召て、諸軍へ「御下知なき内は陣を動くべからず」と触られける。
　然るに本願寺の光佐上人は、去年十一月、殿下の御密計を受給い、薩州獅子島の道場へ御下向有ければ、国主兵庫頭義久も師壇のよし身なれば、戦国の中ながらも是を敬ひ、多く音物を送り、使者を毎日遣はし会釈ある。当国は一向宗の門徒数多あれ共、上人御下向の事は希なる故、饗応をする事、大方ならず。殊に上人の一心一向他念なく、只、弥陀一仏を念ずる時は諸神諸ぼさつも納受ある事をしば〳〵教へまし〳〵、門徒を化度し給いける。彼の御供に召連られし平野遠江守、粕谷内膳正等は、雑式の体にて長の逗留なれば上人の御用と号して爰かしこをさぐり、大抵の地利は覚語し、専ら反間をなすといへ共、知人なし。此度、島津家征伐として太平寺に御陣を召れし事を聞て、国中の様子、案内を言上せんと思へ共、国主の号令厳重なる上に、国堺（境）に新関を儲（設）け、往来自由ならず。然るに依て、上人に密意をさゝやきければ、上人も是に同じ給い、やがて道場の坊官を召れ、
「当国此程おだやかならず。有て甲斐なき出家の身にて、殊に門徒の人々の、みな介抱に預り、永々逗留せん事、国の災いも同じ事なり。早く本願寺へ帰りたし。然れ共、海道筋には上方筋の軍勢満々たれば、通る事能はず。外に趣く道あらば案内なし給ふべし」
と仰ければ、道場坊承り、
「聖は危邦にいらずと承り候。斯る乱国なれば、いかなる災いあらんも計り難し」
と、
「門徒の輩、宜敷計らい奉るべし」
と、一向宗門徒の者を集め、閑道の詮義をなしければ、上人の御事なれば宗門の者共、命おも惜まず、「生如来を送り奉る事也」と、船をとゝのひ、獅子島より千代川迄ははるかの行程なれ共、海上にては甚近し。此事を知りたる者ありて、只一日の内に京泊りの湊にぞ着たりける。時に湊は兵船夥敷せり合て見へければ、案内の者申けるは、
「此辺は御覧の如く上方の兵船多く、上らせ給ふ事なるべからず。是より日向の国、細島迄送り奉らん」
といふ。平野遠江守申けるは、
「日向国は只今戦い最中のよしなれば、却て御怪我あらん事も計り難し。此勢は上方勢ならば、上人の門徒もあらんずれば、却て便宜よろしからん。苦しからず船を着給へ」
と、密に陸路の様子を伺はんと、両人船より上り、殿下の御本陣、太平寺の方に趣きければ、早束御前へ召出されける。時に両人言上しけるは、当国の案内、島津家の剛弱、（ママ）見聞の次第、此度、上人の門徒を語らい、か様〳〵に計らい、獅子島の者共、海上より近道を案内せし事迄、委（悉）く演説す。殿下大いに御喜悦まし〳〵、「外に敵の設たる謀計はなきや」と尋ね給へば、
「さん候。色々と手段を以て聞合せ候得共、一体、当国の軍法は厳重にして、末々

の士卒に到る迄軍事を語らず、一向に相知れ難く候。去りながら、太守義久は本城を守り、嫡子義弘は城を放る、事、三里にして出張す。其間に諸将の備へこれあるよし。然れば防戦の計略もある体にて候」

と申上げる。殿下仰けるは、

「さもあるらん。敵ながらも島津は旧家にして、其令厳密なる」事を御感心まし〳〵、「扨、上人に対面せん」と仰ありければ、両人は即時に舟に帰り、密に上人を具し参らせ、道場坊も倶々に太平寺へ送り、粕谷、平野、船手の人々にさゝやきけるは、

「上人を送り奉りし船を必らず帰し給ふな」

と申ければ、左馬助嘉明、「心得たり」と、余所ながら是を守らしむ。扨又、殿下、上人に御対面ありて、

「此度、当国へはる〴〵下向の事、偏に貴僧の働なり。此上に猶頼みいり度事あり」

と囁き給いければ、上人平伏し、

「一旦御諚に随いし上は、何事にても違背は仕らじ」

と御請あり。則、道場坊を召出し、理解を述て、獅子島迄御案内をなし奉るべき旨、申さるゝ。時に道場坊は、

「たとへ殿下の命をば背き奉る事あり迚も、いかでか師の命には背き申べきや。畏り奉る也」

と申上る。

「然らば謀計は追々申含めん。暫く陣中に止まるべし」

迚、様々饗応有にける。

清正、螺焼の謀計を察する事
幷　薩州勢、佐々成政を破る事

斯て殿下、京泊り迄御進発あるといへ共、薩州の案内しれざるに依て御心を痛め給いしか共、先達而反間にさし越されし平野、粕谷の両人、あらかじめ鹿児島の案内を知たる故、『道場坊を閑道の案内とし、不日に謀略を行い攻詰ん事』と思召ける所に、大和大納言秀長卿、島津中務少輔家久降人に依て同道し給い、薩州に着陣あり。此由、殿下聞し召れ、『家久が降参、子細有べし』と思召けれ共、家久を御目通り被仰付けるが、『彼が計略の程も計り難し。必ず油断すべからず』と御用心ある。

扨こそ九州は大方治るといへ共、薩摩の国計りは其要害堅固にして中々容易の事にて落去すべき様はなかりける。依て密に清正を召れて、粕谷、平野等が言上の御物語あり、「此事如何有べき」と御相談ありければ、清正は暫らく思案し、

「某案るに、島津は義に強く勇計りに非ず、遠謀も有もの也。それに鹿児島へ到る道路、一方口にして外に道なし。道場坊を透し、閑道の案内を得給いし事は天下一統すべきの前表にて、是にましたる大悦是なく候。是、偏へに本願寺の働なり。本道よりせめ懸り候はゞ、決して半途にて変あらん。然りといへ共、粕谷、平野の両人、去年より獅子島に下向する折から、定めし本道を経て其道の様子存つらん。是を承りなば、道路の謀計は案に便りを得べし」

とて、則、両人へ尋ければ、両人答へて、

「本道と申は此京泊りより鹿児島迄の道法十五里にして、外に道はなり。前後は道細くして中道は広く、左右は一面に連りし山にて樹木茂りたり。外を見る事能はず」

といふ。清正聞て、暫く思案し、

「敵の計略大いなり。恐るべし、〳〵。某が察するは、本道所々に勢を伏せて、猶又、中道に到る所にて伏せを多く置、味方の勢を中道へ偽引入て、広道に焼草、薬火を伏置て、味方の進む時に道々の勢を出して戦はしめ、態と広道へ敗走し、味方を勝に乗じさせ追討に進ませ、又、一所にて強く戦はせ、十分に味方を偽引て、後の方の口を大木大石にて切塞ぎ、左右の山より松明を投出し、味方をみな殺しにせんとする結構なり。先手の騒動に紛れて大将の旗本に切いらんずるの術計なり。楠流にて螺焼の謀と号するは是なり。蜀の孔明が司馬仲達を焼打にせしも如斯の術にて、今、日本にて此火薬の法を知らず。用る人希なる故、世に知らず。薩州勢は軍術に委敷故に此所の地利、伝法に叶いたる故に是を用る事

必定なり」
と申ければ、殿下聞し召れて、
「汝が申通り、予も其心は付ざりしが、其地理を考察するに一々理に当れり。只、此謀には進まざるこそ第一なり。其中には閑道に退屈し自ら乱るべし。然る時は謀計空敷ならん。其虚に乗じて攻懸る時には利あるべし。汝、宜敷計るべし」
と上意有ければ、清正畏つて先手を制し、
「麁忽に進む事、有べからず。御下知を待べし」
とぞ触にける。
家久謀計の降参によつて、殿下幷に秀長おも欺きしと思へ共、殿下にはかれが謀計を以て却て味方の謀となし給ふ。此事、後に委しければ爰に略す。猶、外の軍記にも見へたり。
去程に種島弾正、三千余人を卒し、押寄来り、悪口を吐ちらし、鉄炮を打せなどして、しきりに合戦を催すといへ共、上方の先手、御下知なきに依て軍する事ならず。牙をかんで怒りける。降将中務大輔家久は、態と我謀計を隠さんと上方の諸将に申けるは、
「薩兵いか程に匂る共、必ず怒り給ふな。元来、薩兵は智謀の者多し。是より処々の切所に伏勢を置て奇計あらん事も計り難し。必ず進み給ふべからず」
といふ。上方の諸将等は耳にも懸ず、
「臆病者の中務が詞を以て我生国を称するこそ奇怪なれ」
と、一向相手にならず。家久は心中に悦び居るうちに、上方勢は敵の追々〳〵進み来るを見て、御下知をも待ず突出て合戦をいどみける。種島は兼て期したる事なれば、一支へもせずして引て行を、勝に乗つて追欠んとする時、殿下、此事を聞し召、
「下知なき内に戦ふ事なかれと制し置たるに、令を違ふ事、以の外也」
と、佐々陸奥守成政を召れ、「急ぎ諸軍を引上げべし」と仰付られければ、成政畏つて手勢を引具し馳行けるが、味方の人々ははるかに進みければ、馬に鞭を打て馳ける。種島は段々と引程に、所々にて相図をなせば、左右より伏勢起り立て上方の勢を討んとする。成政見るよりも「すはや、味方危し」と、己れが勇に任せて何事おも打忘れ、敵中に馳入て前後左右に揉立〳〵戦いければ、敵兵大いに敗北し、かの細道を押合へし合、敗北す。成政は殿下の命おもわすれ果て、敵は誠に逃ると心得、「我勇敢に誰かあたるべき」と、追立〳〵馳たりける。敵は一声に「早く逃よ。広道に出よ、〳〵。そこにて防げ、〳〵」と呼はり〳〵逃ければ、成政、是を聞て「広道迄はやらじ」と討立〳〵ける。然れ共、元来上方勢は案内知らざる事なれ共、程なく広道に出たりける処に、はるかに一声の鉄炮を響かせければ、左右より大木、大石を投落し、細道の口を暫時に断きりける程に、「こはいかなる事にや」とうろたへ廻る山の上より、投松明を雨の降る如くなげ落しければ、兼てもふけし薬火に火移りて一度にはぢき出して左右の樹木に燃付ければ、四方八面忽ち黒煙となり、天を覆い尺寸の間も見へず。雑兵原は煙りにむせび叫ぶ声は天地に響き、薬火は地中に轟きて、其夥敷事、百千の雷の落かゝりたるが如く、逃れ出んとしても岩角嶮岨なる故、是に突かゝり死するもあり、薬火にはぢかれて即死する者おびたゞし。陸奥守成政は、
「兼て清正がいゝし計略成」
と
「深入せしこそ無念也。我命、爰に終らん事は是非もなき事ながら、火の為に焼れん事こそ口おしけれ。何卒して逃れん」
とするに、味方の雑兵共、馬の左右にとり付、すがりけるを切払い〳〵、よふ〳〵と進みける処に、火は猶盛んになり、成政は身体爰に止まつて忙然たりし時に、天俄にかき曇り、夕立の雨、盆をかたむけるが如く成ければ、薬火の勢いも大雨の為に打消ければ、成政は漸々と細道へ出ける処に、新納、伊集院等、ほそ道に備へを立、逃れ出る敵を討留んと待懸たり。成政、天の高運に依て、漸々〳〵逃れて以前の道へ出て一息継んとする処に、両勢の軍兵「逃さじ」と追取巻しを、成政は千辛万苦して囲みを出たりけれ共、従者は委(悉)く討れたり。元来、成政勇猛たれば、烈風の如く馳廻り、前後左右に突倒し切倒しければ、薩州勢、其いきおいに砕かれて足並しどろに成処を、成政「得たり」と一方を打やぶつて難なく道を求めて走りける。

第廿壱

殿下御手配の事

幷　上方勢、海陸鹿児島へ乱入の事

　此時、殿下は清正を召れて仰けるは、

「島津が謀計、汝推察に違はず火術を行ふと見へたり。山谷鳴動して煙り天に覆ふ。我等、先に陸奥守成政に命じ、先手を救ふべしと申付候事は深き謀ありての事なり。成政は元来勇烈のもの故に敵兵敗して逃るを見るならば、我命おもうち忘れて敵を追欠てその地に入べし。然る時には敵のもふけたる謀事に落入て焼死すべし。あら心地よや」

と仰ければ、清正、正則は不審なし、其子細を伺いければ、殿下重ねて、

「汝等は成政が心を知らずや。彼は其心、狼虎に等しき者にて、此度薩州の征伐に下向すといへ共、容易に島津は征し難し。斯、数日を経る内には、かれ決して反心すべしと、我、甚だ是を心労せし也。爰を以て敵の手をかりてかれを亡ぼさんと思ひし故也」

と仰ければ、両人も舌を振い、

「君の深慮、鬼神もはかるべからず」

と感心しける。殿下仰けるは、

「謀計は密なるを以てよしとす。必ずもらす事なかれ。汝等弐人は我耳目も同前たれば也」

と仰もいまだ終らざる所に、佐々成政は辛き命を助り、這々にて御陣へ参りければ、殿下を初、両人も評せしに違いし故、顔見合てあきれし計なり。成政、御前に出て、清正に向い、

「此程足下の推察せられし敵の謀計を忘れ、深入して辛き目に逢し処に、天の助けにや、夕立頻りに降出し、漸々道を得て逃れ帰りし」

と申ければ、清正は御前に向ひて、

「今日、成政が敵を追欠し事、御下知に背に似たりといへ共、敵の謀略をくぢきたれば、其功に免ぜられ、御ゆるし下さるべし。最早、敵の奇計破れたれば、恐るゝ事なし。本道の通行心易し。是より海陸共に鹿児島へ御発向ありて然るべし」

迚、先、御手分を定め給ふ。

「船手には加藤左馬介嘉明、九鬼大隅守嘉隆、脇坂中務少輔安治、外に平野遠江守長泰、粕屋内膳正両人を案内として、五百余人、獅子島に渡り二ノ手として押寄べし。山手の閑道は加藤主計頭清正、福島左衛門尉大夫正則、黒田勘解由次官孝高、同甲斐守長政、池田三左衛門尉輝正、案内者として顕如上人の命によつて門徒の面々、密に進発す。本道よりは正兵として蒲生飛騨守氏郷、前田肥前守利常、堀左衛門督秀政等、大軍にて攻寄すべし」

と、海陸惣勢廿八万余騎とぞ聞へける。

　時に天正十五年五月廿日、上方勢、海陸よりひし〳〵と宵闇に乗じて、獅子島の道場坊、其外門徒の俗人を案内者として陸路は月の出を待て、知らぬ山路をたどりつゝ、人には唄を含せ、馬は轡をからみおしよする。主計頭清正は殿下の命を受て、紙はたの差物等を移して用意し、山路の高き所の木の上に件の旗を差上、奇兵の体をなしたり。右の山の手より進む人々は、福島正則、黒田父子も同く紙のぼりの計略をなし、道すがら鉦太鼓を残し、山路を経てしの、めの頃に伊集院が陣の後に出たりける。

　明れば五月廿一日、本道の寄手七万三千余人、殿下の御名代として大和大納言秀長卿、武威連綿として本道にても奇兵を行はせ、はや、先陣は広道、中陣は細道に陣をはりて扣へたり。「閑道の勢廻りなば、敵陣騒ぎ立べし。其時、急に押寄ん」とぞ計りける。此時、薩州勢は敵軍本道より押寄せ来るとのみ心得て、閑道へ敵廻りし事は夢にもしらず。本道に奇計を構へ、わづかに雑兵のみにて、将士にはか〳〵敷は壱人もあらざりし故、諸将、評義の上にて、種島弾正を残し置、「寄手と戦い、偽り負て引返すべし。敵、勝に乗て進む処を左右の山より新納、伊集院が輩突出て、三方より引包んで一人も余さず討取べし」と、義して敵の寄るを待かけたり。時に上方勢、中道に扣へて進まざれば、薩摩勢、思ひらく、

『是は案内しらざるといひ、又もや奇計あらんと疑ひ、進まざるなり』

と、あざけり笑いて扣へたり。所に義弘の本陣より早馬、砂煙りを立て告げるは、

「上方勢、いづくより廻りしにや、数万の敵兵、大将の本陣に押寄て、只今合戦最中なり」
と申来りければ、諸将大きに驚き、急て本陣を救はんとするに、「此所も又、捨置れず」と、諸将評義区々にして、騒動なゝめならず。此時に、はや船路の大将、獅子島へ着とひとしく二手に別れ、義弘が陣の後に出て、薩州勢の堅めたる持口〳〵に突入、矢炮を飛して火矢を射懸、面もふらず無二無三にもみ立れば、剛勇の義弘、鉄石の従兵等も不意を討れて、「是は天兵なるや」とあわて騒ぎ、防戦の途を失ひ、大きに乱れ立、陸地の勢は船手の戦ひ初るを見て、左右より池田輝政、黒田父子、山をおろして表より義弘が本陣へ押寄たり。島津家、是を見るより「こはいかに」と肝を消し、何十万の敵なるやと義弘も余りの事にあきれ果、下知のしよふもなく、従者五、六人随へ、一方を切ぬけてよふ〳〵逃れ出けるが、征久、俊久、川上、松尾の輩も防ぐに術なく、皆這々に本城をさして引退く。上方勢は追詰〳〵分捕高名なしたりける。時に、武蔵守忠基、伊集院忠棟が本陣よりの知らせに依て、正面は種島、松田に守らせ、「本陣こそ大事なり。救はざる時は危し」と五千の兵を引卒し、馳向はんとする処に、加藤主計頭は新納が陣に責懸り、
「汝等早く降るべし。城ははや乗取たり。夫を知らざるにや」
と嘲り笑い、突懸りければ、武蔵守は大いに怒り、
「汝等が心にくらべて降参せよとは奇怪なり。忠基のあらん限りは降参すべきや」
と、
「大軍を甲に着ても蟻の集る同前の兵ども、我一人有時はみな殺しにしてくれん」
と、加藤が勢に彼の鉄の棒を車輪に廻して討て懸るに、忽に七、八騎を打て落し、四角八方にかけ立けるにぞ、加藤の郎従中西東三郎、弓の達者なれば、鎧脇に立て、満月の如くよつ引て放つ矢、武蔵守が胸板へはつしと当る。され共、あつ鉄の鎧なれば、矢がら砕て飛散たり。武蔵守は怒りをなし、
「蠅虫めがやさしき仕業哉」
と、鉄棒を振上て、怒り猛つて中西を目がけ、風雷神の如く馳来る勢に恐れをなし、弓矢を捨て逃出す。新納は大喝一声飛懸り、後より中西を打ければ、首は胴にくい入て微塵になつてぞ死したりける。

島津勢、敗軍の事

幷　上方勢、義弘が本陣を奪ふ事

清正は眼前に郎従を討れ、何かは猶予のあるべきぞ、武蔵守を目懸、飛竜の如く馳来る。新納は本城の救いに心せけば、馳行んとせし処に、清正声かけ、
「夫に見へ給ふは武蔵守と見へたり。清正、是にあり。返し合せて戦へ」
と呼はりければ、武蔵守は馬の頭を引返して、「みぢんになれ」と打懸る処を、清正ひらりと受流し戦いけるが、武蔵守、急度思ひけるは、
『先達て千代川原にてかれが為に助けられたれば、今、我逃たればとて臆病には非ず。彼は誠の武士なり』
と、忽ち勇気くぢけて、義勢もなく、清正をふり捨、駿足にむち加へて飛が如く馳たりける。清正は兵を下知して追かけ行。
爰に福島正則は伊集院と戦ふ処に、是も本陣へ心せくといへ共、正則手痛く攻つめける故、是非なく踏止り、大いに血戦したりける。福島は剛強の大将たれば、少しも屈せず、なぎ立〳〵攻立れば、伊集院勢は乱れ立、敗走の体に見へければ、忠棟は猛に訇り下知をなし、崩るゝ味方を追返しける。軍事になれたる兵士なれば、実にその下知は環を廻すが如くなり。伊集院は彼是する内、人数を引揚て本陣さして馳たりける。左衛門大夫正則は「思ふ敵はもらさじ」と、兵を下知して追て行。福島が先手の武者、難所に支へられて三人迄落馬する故、是を乗越し、走り行に、伏兵起り立て矢炮を飛しけるに依て、正則が勢、多く討れけるに依て、少し猶予しける内に、伊集院は遠く逃れ走りける。福島は是にも凝気せず馬を飛して追かけたりける。正面の種島、松尾等是を支へて戦う。新納と伊集院は本陣に到りけるに依て、爰にて暫し支へて種島、松尾の両人も、「爰にて戦いたり共、詮なし。前後をかこまれざる内に本陣に到らん」と、一万余人を引卒して退きける。
時に正面のよせ手、中路の広道に見合せ居たりしが、鬨の声を造り、鉄炮の音

おびただしく聞へければ、
「扨は味方の奇兵廻りたりと覚へたるぞ。進めや〳〵」
と、蒲生、前田、堀の三将、馬を飛して進みける。島津が一方の勢、星の流る、如く連りて本陣へ退を見て、「早々に追付て討取れ」と呼はり〳〵、勢いを励し、もみにもんで追打しけるに、其間近ければ、鉄炮を打かけ透間もなく押詰けるに依て、薩摩勢は馬の頭を立直し、前後の陣をくり返し、追来る敵を引受て戦ふ。氏郷、利長は戦を脇に見なして、中道に入て横矢をいたりければ、必死の薩摩勢、少しもいとはずして惣勢を励まし、真黒に成て戦ふたり。秀政は正面の薩兵を引請てもみ立る程に、種島、松尾、町田も粉骨を尽して戦いけれ共、崩れ立たる勢いなれば、大いに乗おくれし、やゝもすれば下鑓となりければ、秀政は軍功の者なれば、
「敵ははや色めきたるぞ。進め〳〵」
と下知し、縦横無尽にもみ立れば、島津勢こらへ兼て大崩れとなり、散々に敗するにぞ、種島、町田等も心はやたけにはやれ共、乱れたつたる事なれば、立直すべき術もなく、四度路に成、敗しける。
　此時、本陣には義弘が兵、散々に敗走し、南の方へ八町計退きけるに、船手の諸将、残兵を追かけ来り、敵の貯置しもの共を味方の物になし、只、陣を持堅めんとする処に、新納武蔵守は本陣の危を聞て五千余人、烈風の如く馳来り、本陣を奪返んとする折から、清正は跡より追欠来り、武蔵守が勢を取かこんで討んとする。武蔵守は剛勇の士なりといへ共、前には五万に余る敵勢有て進事能はず、後には主計頭が兵厳敷攻懸りけるにぞ、武蔵守は進退爰に迫つて戦ふ事ならず、『所詮討死せんと思いしか共、乱軍の中にて討れんよりは、本城へ帰り、主人と共に存亡を極めん』と、五千余人をまん丸に備へて、横さまに突通り、道を開いて退きける。主計頭は、『爰にて武蔵守を討取べし』と思ひ、見合ける所に、新納が体、ゆゝ敷脇道より退きければ、本意なくも、追かけたり迚も案内しらざる敵地といゝ、士卒も今朝の戦いに労れたれば、兵をまとめて追事なく、元来、清正は十分の勝を好まず、万事を覚語して戦をなす故に、終に合戦に不覚を取たる事なし。
　伊集院は義弘の案否心元なく来りしに、はや本陣は敵に奪はれたれば、「よしなき戦いをせんよりは」と、道をかへて逃去、義弘の安危を伺はんとする所に、正則厳敷追かけしかば、伊集院も支へ兼、「今は爰にて討死せん」と突懸け来鉾先のするどき事、中々言語に及ばず、正則が兵を忽ち四、五丁計り追立たり。正則は牙をかんで兵を進めけれ共、今朝より数度の軍に労れたれば、四度路になりて終に追ふ事能はず。伊集院は正則を四、五丁追立て、爰に備へをまとめて直に引入たり。正則もせん方なく、味方の陣に入たりける。
　清正は追ふべき敵を追はずして勝たり。正則は窮冠を追て暫くも追たてられたり。誠に正則、清正、両雄かならず向ふ所敵なく、然りといへ共、清正は軍の理発明にして、全勝あり。爰を以て見る時は、正則は清正より軍は仕過たりと見へたり。併ながら、勇剛なるは車の両輪の如く勝劣はなかりし也。
　扨、先陣の諸大将、会合して此由を殿下の御本陣に注進に及びければ、御満悦浅からず、別使長束大蔵少輔、熊見和泉守を以て諸将に御下知有けるは、
「殿下思召是有によつて、みだりに進事なかれ。只、義弘が本陣の跡を堅めて、軍義厳重になすべし」
と仰渡されける。
　扨、御本陣にては、諸将を集められて、太平寺の住職を召されて仰けるは、
「予、当国に下向なして島津一家を誅伐せんと思ふ。然りといへ共、島津家は昔より旧家にして殊更右幕下頼朝の血脈たれば、今、無下に退転せん事はちか頃痛いつたる事なり。依て住僧、駕をまげられて理解し、帰降なさしめ給へ。是、天下泰平の基なれば、宜敷計い給へ。是迄の罪は秀吉、宜敷伝奏すべし」
と有ければ、太平寺の住僧畏り、其仁慈の程を感心して、急ぎ鹿児島へ到りける。

第廿二

義久以下降参の事

幷　九州一統平均の事

　斯て太平寺の住寺は、殿下の命に依て直に鹿児島本陣に到り、義久、義弘に対面し申けるは、

「此度殿下九州御下向あつて一統に政事を示さるゝ処、九国委（悉）く殿下の御下知に随い降参せし処に、御父子は武の意気地を立給い、既に合戦に及ばる処、敵兵、人しらぬ閑道を経て鹿児島へ乱入す。依て御味方大いに破れたり。然る時は殿下の御威光強く、諸士の勇猛もあまねく強大にして、御当家の滅亡も旦夕にあらんと存候。併ながら、再び御当家の勝利とならんかはしらず候へ共、抑、御当家は鎌倉の右大将家より以来、連綿たる当国の守護として御太切の御家柄なり。然るを今一朝にして断絶あらんは夢々もつてあるべからず。御先祖への御不孝と存候まゝ、一旦の和睦あつて、殿下に降参あらば、御家長久の基たるべし。先頃よりして、殿下の廿万余の軍勢に対し御合戦の事、誰かは御当家の弓矢を未熟なりとさみする者有べからず。急ぎ殿下に帰伏有べし」

と、理解しけれ共、更に用いず。時に住僧は殿下の御仁慈を解て、数度進めしかば、よふ〳〵心とけて、

「秀吉の所存斯迄も当家をおしみ、我々が弓矢を称するにや。とはしらずして今日迄も戦いをなしたる事、却て愚昧の到り也。今はいかで猶予せん。和僧の了簡に随い降参すべし」

と、夫より一族郎従を招きて評定に及びけるに、各一同に「然るべし」と申ければ、住僧へ右の趣返答に及ばれければ、なゝめならず歓びしさつて申けるは、

「御承引の段、悦び入て候なり。君、国家の為に拙僧と御同道なされ、殿下の御陣へ御出あらば、弥、静謐ならん」

と言。義久聞て、

「斯降参する上は、いかでか殿下の御陣に参らざるべき」

と、即時に用意なし、住僧と同道し鹿児島を出て、太平寺の御陣へ到りける。

殿下は長老の返事を待せられて、諸将へも乱妨狼藉を制せられければ、万民安堵の思ひをなしける。時に島津兵庫頭義久は、太平寺の住僧を案内として御陣へ参候して、降参の由を申上られけるに、殿下なゝめならず御悦び有て、則、召出されける。時に住僧、義久を伴ひ披露ありければ、殿下は欣然として仰けるは、

「予、四海一統して帝の震襟を安んじ、下万民の塗炭のくるしみを救はん為に、度々使を下して朝参の事を進る処、父子共、是を用いず。是非なく勅を蒙り下向せし処に、誠に足下の弓矢の程、感ずるに余りあり。然りといへ共、私に非る戦いなれば、武略も弓矢もいかで王化に敵対叶ふべきに非ず。即時に当国に入て其罪を糺さんと思ひし処に、先非を悔、降参の上は忠勤怠りなく、異心あるべからず」

と宣ひければ、義久、頭を畳につけて、更に秀吉の面を見る事能はず、おのづから頭を押へるが如くにて、全身は水を流したる如く汗になりけり。此時に始て殿下の御威光を眼前に見て、演説すべき言葉もなく、只「有難し」と計にて平伏有ける。夫より何かと御明察の事共多かりければ、義久驚き、たゞ秀吉公の御懇情、肝にめいじ、「豊臣のあらん限り、我あらん限り疎略仕るまじ」と誓心のおこしける。将して後年、関が原合戦に秀頼公へ忠勤を尽してけるも、此時の御仁慈によりける所なり。殿下、其後仰出さるゝは、

「薩摩、大隅は本領たれば安堵せらるべし。日向の国の事は伊東が本領たれば、返し与ふべし」

と也。

「其余分の所は蔵入とすべし。併ながら、遠国の事なれば、又七郎へ代官の事頼みいる也」

と安堵なさしめ、一族郎等御目見も相すみけるに依て、九州は一統に御政事仰付られ、目出度「御帰陣あるべし」と御用意有所に、義久は剃髪して竜伯と号し、義弘御見送りの為、上洛仕べき旨申上る。殿下には片時も早く御帰陣あらんと、太平寺を御立ありて天堂の尾に御陣をすへ給ふ。

新納武蔵守忠基、只壱人、主の降参をいゝがいなく思ひて、此所に出て御帰陣を支へけれ共、終に義久父子、殿下の御懇情を伸（述）てなだめけるにぞ、新納も主命といゝ、是非なく帰伏なしける。殿下は武蔵守が勇気を感じて、御前に召れて、

「此程より其方の働き、実に勇猛の大将なり」

と賞美ありけるに、武蔵守も始て殿下の寛仁大度なるを感じける。是に依て当国全く治りければ、此度九州御退治の功ある面々へこと〴〵く恩賞を給はりける。

爰に兼て御計略の一つなればとて、佐々陸奥守成政には過分に恩賞あり、肥後

一国を賜はり、一国の政事を任せ置れける。其外の諸将へも闕国の分を与へ、御仕置も残る処なく相済ければ、諸将を引連、目出度大坂へ御帰陣ありける。

斯て九州静謐に治りし旨を参内ありて奏聞ありしかば、帝を始め月卿雲客、秀吉の武功を感じ思召て、厚く勅報ありける。是よりして殿下の御威光次第に盛んになり、草木の風に伏すが如くなり。此時、島津義弘は深く殿下の御厚情を感じ、引続いて上洛あり。御礼申上ければ、殿下にも御懇意の上意あり、伝奏の上、三位法印に義久をなされけるとなり。

今、薩摩にて本願寺門徒を厳敷制禁の事は、光佐上人、秀吉公と調じ合せ、閑者となり、入込、閑道をも知らされし事、後日に露顕し、一向宗は委(悉)く制禁し、道場坊は罪科に所(処)せられ、今の世に到る迄、切支丹にひとしく停止せる事、世の人の知る所なり。然れ共、其後、故ありて薩州の人々、内々一向宗帰依ある事は、薩州の家中に本願寺蓮如上人の直筆の名号あり、宝暦年中奇瑞の事あり。依て、右宗旨を捨ず。委細爰に略す。

佐々成政陰謀の事
幷　清正、宮田左京を欺く事

豊臣殿下秀吉公、他年の御心労に思召たる九州も即時に征伐成りし故、大ひに御喜悦ありて、軍功の諸将に夫々に恩賞ありける。中にも加藤主計頭、四国征伐の砌よりして大功をたて、又、島津においては第一の功たれば、殿下、甚御感心ありて、一かどに御取立あらんと思召けれ共、御腹心の御家来なれば、外様大名の手前を思召て格別の御褒美もなく、先、少々の御加増にて追々は国主にも御取立あらんと思召て、内々御沙汰も有ける。主計頭も君の御心慮を知る故に御恩賞軽しといへ共、少しもうらむる気色もなく、弥忠勤を顕はしける。

或時、殿下、主計頭を召され仰られけるは、

「此度九州において、其方が計義、数度にして味方大いに勝利を得し事、誠に汝なかりせば、九州の一統せん事も難かるべし。即時に功なりし事、汝が功労少なからず。東国の政事を示さんと思ふ其上、予が所存あれば、其時にも汝、予に代りて存心を立べし」

と仰ければ、清正畏り、

「此度西国一統の御政事示さるゝ事、偏に君の御仁慈による所なり。且、東国御平均の思召、是又然るべしと存奉り候。微臣も君の御威光を頂戴、日本はおろか、唐、天竺迄も切随へ申さん事、清正が所存に候」

と申ける。此時、清正の詞は殿下の肺腑を察したる所也。殿下は大いに感悦あり、

「其方が詞の如く、我所存にも唐、天竺迄も」

と宣いける所に、近習の面々伺公するにより、跡は仰なく御笑ひありける。主計頭は、此時は殿下の外国を責給ふべきを察したる故に、其身も内々心懸て其用意をなし、武具馬具等迄能々拵置しゆへ、後年、朝鮮国を征伐の折から、先陣を仰付られて人々より先に出陣せしか共、差支へたる事なかりし。又、彼国に到りて猛威を振い、今の世迄も鬼神上官と書て家々門戸に張りて、悪魔降伏の守り神と敬ふとかや。

爰に又、虎狼の子は必ず養ふべからずといふ古語の如く、佐々陸奥守成政は、秀吉公の明察の如く、九州征伐の已後、肥後国の国主に命ぜられ、御懇の計いなれ共、誠心を尽し忠義の心は更になく、殿下の御威光を妬みおりける。元来、成政は織田家旧臣にして、柴田、滝川に同敷もの也。ある時は秀吉を散々にさみし、

『今彼、威を振うといへ共、元は尾州の土百姓なり。古主信長の見出しによつて幸を得、日に増て威勢を振いて、織田家の連枝、旧臣たる我々を幕下となし、将軍の位を司る事、近頃以て心外也。我、今、微力たるに依て、彼に随ひしか共、今、肥後一国を領して大身と成たれば、是、天の与へなり。何卒、義兵を起して秀吉を亡し、神戸殿、柴田、滝川等が供養に備へん』

と、よしなき事を思ひ、且、天下を掌握せんと及ばぬ望みを起し、内々反叛の企をなし、家老尾藤甚左衛門と密談して、反叛のほぞをぞ堅めける。此尾藤は元来佞奸邪智の者なれば、専ら成政を進め逆意を計りける。

爰に佐々が腹心の郎従に宮田左京友政といふ者有。主人成政、内々の企を聞て大いに驚き、

「今、四海に横行し、天下に敵する者なきといふは殿下也。是、天より命ずる所にして、人力の及ぶ所に非ず。昔より位に昇り、威をふるふ人多しといへ共、殿下の如きは聞も及ばず。然るに成政、よしなき謀反を企らるゝ事は身の滅亡を招くの基、つたなき計略と申べし。若、此事、外より顕はるゝ時には、主人をはじめ一家中委（悉）く滅亡すべし。然れば、ひそかに仁慈ある大将を見立、此事をあかして、主人の家の難義にならざる様に計るべし」

と、短才愚智の左京、『是こそ上策なり』と思ひ極めて、成政が前に出て、

「内々の思召立ある事を聞及ぶ。如何なる訳」

と尋ければ、成政、元来腹心の宮田の事なれば、隠すべき様もなく、有の儘にいゝ聞せければ、左京友政は、

「然るべき御企なり。然らば、某、只今より密に姿をかへて上洛し、大坂の変を伺ひ、もし宜敷手懸りも候はゞ、早束に告申さん」

と欺きければ、成政、「此事実情なり」と心得、大いに悦び、

「汝、随分心を攻て聞合すべし」

とゆるしければ、左京は『仕済したり』と悦び、早々用意して大坂に到り、『何れの大名に便りて、此事を談ずべし』と工夫なしけるが、当時、主計頭清正は、仁慈といゝ、智謀といゝ、殊に殿下の御覚もめでたければ、『此人にこそ語ん』と、即時に清正が館に到り、取次を以て言入るに、折ふし清正在宿にて早そく呼入、対面し、子細を尋ければ、左京は小声になりて、主君の企の事を巨細に語り、

「何卒、貴君の御計らいにて、主家滅亡なき様に御計い下さるべし」

と申しければ、清正は心中大いに驚きて、欺笑い居たりしが、兼て殿下の御諚ひし〳〵と合たるをかんじけるが、

『成政が如き奴原、謀反すれば迚、何程の事あるべし』

と思ひける。

『され共、螻蟻の一穴より千丈の堤も崩るゝのたとへあれば、隙どらば大変に及ばんもしれず』

と、左京に向て、

「足下の忠心、感じ入たり。万事は承り届たり。主人の事は随分我等よろ敷取なし参らすべし。先々、足下を御城へ同道し、事の様子を言上すべし」

と、宮田左京を伴い登城して右の様子を具に言上しければ、殿下笑らはせ給い、

「此老賊、はたして我推量に違はず反逆なしたるな。然る上はいかゞして是を誅すべし。主計頭が異見は何とするや」

と御尋ありければ、主計頭申上げるは、

「成政、謀反するといへ共、未だ敵の色を顕はさず。今、上洛を進め給ふ共、身に曇りあればすみやかに上洛すべからず。依て君、兼て思召立給ふ東国の北条征伐の事、仰遣はされて、成政に早く馳登るべしと仰あらば、いまだほぞの堅まらぬ内なれば、疑れん事を恐れて上洛する事速かならん。其時、ケ条を以て詰腹を切らせ然るべし。左候はゞ、一騎壱人おも損ぜず騒動の事なく、静謐に事治るべし」

と、謀略を言上しければ、殿下大いに御感悦あり、

「汝が計い至極せり。猶も疑をさくべき為に宮田にかよふ〳〵に申含め、先達て国へ帰すべし。然らば成政異義なく馳登るべし」

と仰せければ、主計頭は畏つて宮田を伴い、私宅に帰り、

「某、さま〴〵と御詫申上候故に大方は御承引あるといへ共、『成政直に上洛せざれば安心ならず。呼登せ申べし』と仰出されたり。『若や成政に恨有者の讒言にはあらざるや』とも思召故に、成政上洛なき時は、足下の忠心却て讒言の如くに成べし。然しながら一通りにては上洛あるべからず。依て足下は国元へ立帰り、かよふ〳〵に申置べし。然らば此方より使者を遣はす時には、速に参向あるべし。万事は主計頭が請合たれば、宜敷計い申べし」

と欺ければ、左京は悦び、清正が懇志を悦び、用意もそこ〳〵になし、東国へ下りける。

第廿三

清正、成政が罪を糺す事
幷　陸奥守成政切腹の事

往昔より逆謀は一旦志を得る者ありといへ共、天、其悪を惜み給ひ、終に滅亡せずといふ事なし。

されば、肥後国の佐々陸奥守成政は武威絶倫の者にて、織田家においては一方の将たりしが、今、秀吉公、天下一統静謐たらしめ給い、武将の上に立給い、旧功の臣、其外の諸将へも厚く加恩ある中にも、成政には肥後の国を給はり、懇情をかけ置給いけれ共、佐々は秀吉の下知に属せん事を心外に思ひ、謀反の企、秀吉の威をくぢかんと家中の評定も取々なり。然るに『何卒して近国の大名を一両輩も語らい候はん』と思へ共、『大義なればうかつに口外すべきにあらず』と、さま〳〵工夫を廻らし、『上方の変を待て一同に事を発せん』と見合有し処に、先達て間者として上京させし宮田左京友政、帰り来り、直に陸奥守が前に出て申けるは、

「某、京、大坂に徘徊して琁と様子を伺ふ所に、殿下には近々に北条を攻られんとの軍、用意最中なり。在京の諸将も是によつて追々〳〵御暇を給はり、支度をなす。大方、君へも催促の事申来り申べし。君、此虚に討て登り給はん事、幸ひ也といへ共、若、催促の使者来らば早束に上り給へ」

といへば、成政悦びて使の来る〔を〕待居ける所に、殿下の使者のよしにて長盛を以て命じ給ふは、「此度、北条征伐について早々出馬せらるべし」との事なり。成政は兼て覚語せし事なれば、少しも疑ふ事なく、すぐさま上洛すべき旨を申、長盛を厚くもてなし帰し、手勢弐千余騎を卒し、早束国を発足し、上方へと馳登りける。尾藤、宮田も成政に随ひ、追々に馳上りける所に、程なく尼ヶ崎に到りける所に、主計頭清正は御下知によって尼が崎に向ひ、則、使者を成政方へ遣はし城中に請じければ、いぶか敷思ひ、『何故に我等を招くにや』と猶予の体に見得ければ、宮田左京罷出て、

「何の疑ひ給ふ事かあらん。清正殿は腹心の臣なれば、爰にあつて不意の変を防がん為なるべし。今、城中へ請ずるは、君の労を謝せん為成べし」

と進めければ、成政、宮田に透されて、何心なく城中に入ければ、清正は本丸に請じいれ、密に力者を小影に隠し、物語りをなす内に相図をなしければ、力者共委（悉）く走り出て、何の苦もなく成政をとらへて縄をかけたり。近習の武士、二十余人をもひし〳〵とからめとりける。成政は怒りの声をあげ、

「いかに、主計頭。如何なる子細あつて我等を城中へ偽引入て、斯面縛するや。子細を述ず、理不尽の振廻ひ尾籠至極なり。返答に依て、我、たとへ死す共、汝を安おんに置べきや」

と、眼を怒らし、にらみ付ければ、清正は大いに笑ひ、

「私の意趣を以、人をそこのふ主計頭と思ふや。汝、内々反逆の企をなし、殿下を亡ぼし奉らんとする事、卵を以て大石を砕くにひとし。及なき事を労せんより早く心を改めて死を善道に守るべし」

と、欣然として申ければ、成政、『扨は陰謀露見せしか』と驚しが、元より不敵の者なれば、少しも動ずるけしきなく、陳じけるは、

「我に反逆の有とはいさゝか身に覚へなし。但し証拠ありや。人の讒言を実とし、諸将を誅戮する時には、一人も安穏なる者は有べからず。能、事を決して行ふべし」

といへば、清正重ねて、

「汝、何程陳ずる共、慥なる証人あり。呼出して対面さすべし」

とて、宮田左京を呼出し、

「此者、先達て上坂なし、汝が密意を委（悉）く注進せり。其節、早束討手を遣はし誅罪せん事は安しといへ共、兵士の労を思めし、穏便に汝を召寄給いしは君の深深慮也。斯る証人あり。是にても争ふにや」

と申ければ、成政、是を聞て左京をにらみ付、

「飼犬に手をくはれしとは此事なり。汝、賊匹夫。此恨みを晴さで置べきや」

と、怒りの牙をかみたりければ、左京も答ふべき言葉もなく、赤面してぞ居たりける。主計頭、重て、

「汝が反逆に与すべき者なれ共、宮田左京、先達てねがい上し事あれば、謀反の沙汰は包み隠され、宜敷罪を糾問すべしと、我に御下知なり。是、君の御仁慈の到る所也。今、汝を助け度思へ共、先法の外に数か条の罪科あり。是によつて切腹仰付らるゝなり。然れ共、宮田が忠義に免じ、汝が家名は恙なく立置る故に、並々〳〵の切腹仰付らる。忝き御堅慮也。有難く御請申さるべし」

と、理非明白に言渡しければ、成政も理に伏し一言の返答もなく、閉口して扣へければ、左京は主人の切腹と聞て大に驚き、口を開かんとする時に、清正、左京に向い、

「成政助命の事を汝に請合しか共、殿下の御怒り深く、しばり首にも行い、家国を没収すべき旨、仰渡されしか共、某、いろ〳〵御嘆き申上、漸々切腹に事決したり。さぞ便りなく思ふらんが、汝が注進せずとても成政が罪重ければ追々露顕すべし。其時には獄門の恥をさらし家国を失い、武名も消失べき事也。誠に今日、成政が死は自業自得と心得べし」

と有ければ、宮田左京、案に相違して、

『斯なる事ならば、主人と存亡をひとつにし、注進はすまじきものを』

と後悔するといへ共、詮方なく、

「主人を初、傍輩の手前へ麁忽の働き、はづか敷、此後、主家の行衛を見んも物ぐるしき」

とて、剃髪して山寺に引籠り、成政が菩提を弔いけるとなり。

加藤、小西に肥後国を賜る事

幷　北条氏政滅亡の事

去程に清正、佐々が罪を糾明し、即時に御下知状を取出して読上ける。

一　陸奥守事、殿下に対し奉り謀反仕候事、曲事に思召といへ共、御不便に思召、肥後国を賜る事

一　肥後に一揆を為企候事、曲事の一つ也

一　陸奥守、南蛮の宗門信仰の処、先達て右宗門を相止候様申付候処、許容不仕候事。

是等の罪科不少候。此故に切腹申付るもの也。

四月十四日　　秀吉　判

高らかに読上ければ、成政を初、近習の者、一言の詞なく赤面して扣へければ、清正、即時に用意をなし、切腹の式法を正して陸奥守に与へければ、今は陳謝に及ばず、清正に対し一礼なし、

「誠に貴殿の御計いにて、此上は佐々の家名断絶に及ばざる様に偏に頼み存る也」

といゝて、いさぎよく切腹なして死たりける。成政に随ふ者共、「死手の供せん」と銘々に切腹を願いけるに、清正は是を制するといへ共、聞入ず、主人と席を同じく生害なして死たりける。主計頭はかれらが忠義を深く感じ、成政を初として殉死の者の死骸を厚く葬らしめける。

斯て成政が切腹せし旨を言上し、末期の願ひ、家名の事を言上なしければ、「成政が罪は重しといへ共、いかで子孫に及ばんや」とて、倅三九郎成景を召れて、御旗本に列し置れて五千石を玉はりける。殿下の此度清正が穏便の計いを感じ思めし、是迄の功労かた〳〵、佐々が領国肥後国を二つになし、弐十五万石を清正に賜りける。八代の城に廿四万石を添られ、小西摂津守行長にぞ賜りける。

私に曰、清正、佐々に切腹をさせしか共、宮田左京が誠心を感じ跡目おも願ひ、又、成政を初として殉死の者残らず追善供養なしける故に、佐々が家来、みな是を感じ、浪人して零落せんよりはと、皆、清正に付属しける。

時に武蔵大納言家康公、清正に妻室なき事を聞し召、水野が娘を養となし給いて清正に嫁らせ給ふ。清正も面目を施し、婚義も滞りなく済けるとなり。

去程に主計頭清正は、肥後半国を給はり、熊本に入国せられけるが、既に川尻といふ所迄来られしが、此所は到つて風景よき所にて、酒宴を催し、諸士を集めて数刻海上を眺望せられける。清正、興に乗じて、

川尻にへ先揃へてこく船の
かぞへて見れば九艘ありける

と狂歌せられければ、一座もどつと笑ひ興じける。夫より熊本の城にいられければ、佐々が郎従、清正が仁慈厚徳を感じ、皆随身せん事を願ひければ、清正、「佐々が切腹の上は臣下には御咎なし。召仕て遣すべし」と、殿下より命じ給いければ、みな〳〵安堵なし、小西摂津守が方へ仕ふる者もありけるが、然るべき者はみな清正にぞ属いける。

曰、是より清正入国の後、天草の一揆を退治し、肥州においてより〳〵合

戦の事あれ共、事長きに依て、只、名目計を顕すのみにして爰に略す。

去程に、殿下は日本おゝむね切随へ給ふといへ共、いまだ東国の方帰伏せざる者多し。其中にも相模の国、小田原の城主北条左衛門大夫氏政は、関東八ヶ国を領して、其威勢大いなれば、かつて殿下の命に随はず、上洛もせざりければ、殿下怒らせ給いて、『大軍を発して討潰さん』と思召けるが、『先々戈干（干戈）を動かせず、徳川殿は北条と縁者なれば、此人を以て今一応北条をなだめられん』と思召、則、徳川殿へ此事を申させ給ふ。徳川殿にも、殿下の寛仁なるを悦び給い、即時に榊原式部大輔を以て小田原にさし遣はし、氏政父子に理解し給いて降参を進め給ふといへ共、氏政父子を初、家族郎従、秀吉の下知に随はん事を無念に思ひ、承引の色なし。依て、徳川殿にも気の毒に思召けれ共、詮方なく有の儘に言上ありければ、殿下、「此上は力なし」。早束軍の用意をなし、小田原へと進発ある。氏政も先達て此由を聞て、関八州の城々に兵士をこめ置て、殿下の勢と戦いけれ共、上方勢は大軍にして北条家の城々を責落し、押続いて小田原の城を囲み、昼夜分ちもなく責立ける故に、今は防ぐに力尽て、氏政、氏照は切腹し、氏直は高野山に登り、其外の諸臣もこと〴〵く滅亡し、北条九代の家名も此時に断絶せり。去れ共、其後、美濃守氏邦に壱万石給はり、家名を継せ給いし故、今よふ〳〵に残れり。

第廿四

殿下、朝鮮征伐仰出さるゝ事
幷　主計頭、題目の簇拝領の事

斯て殿下は、さしも関東に威勢をふるいし氏政を征伐あらんと相州に発向あり、攻付給いしかば、北条家の者共、防戦力及ばず、終に落城に及びければ、殿下は八州の政事を命じ給いて、直さま奥州に発向あり、彼地をも委（悉）く属せしめ給いしかば、爰において天下一統に静謐に及びける。兼て徳川家へ御約束なれば、関八州はみな徳川殿え参らせ給い、めで度御凱陣に趣き給いしに、既に三州岡崎に着御有ける。時に主計頭清正、ひそかに言上しけるは、

「是より愛智郡中村へは九里の行程なれば、願はくは御立寄有て然るべし。古語にも『立身して故郷に帰らざるは、錦を着て夜行するにひとし』といへり。あわれ、御駕を寄られ然るべし」

とぞ伺ひける。秀吉公、打笑はせ給い、

「汝、能も心付たり。我、元より其志あるなり。立寄べし」

とて、則、其旨を命ぜられて、諸勢は岡崎に残し置給いて、清正を始としてわづか三千余人の者を引連給い、愛智郡中村に到り給へば、百性共、殿下を初奉り、清正が行粧を見て、「扨も〳〵、希有の立身かな」といゝて、天地に拝伏して行列を拝見致しける。則、本明寺といふ寺にいらせられ、所の百性共に永代千石の地を与へられ、「都に住居したき者は召連らるべし」と有ければ、若き者共は悦び、御供を願ひける。殿下は御機嫌よく、此寺に御逗留有ける時、清正はしるべの方へ到りて懇情に挨拶なし、相応に送り物なしければ、みな〳〵悦びて、清正が深切を感じける。斯て殿下は、此時の若者共御願ひ申、御供なして大坂へ御凱陣有ける。誠に応仁の乱より数百年、一天大いに困窮し、一日も穏かならず。然るに、今、殿下の時に当つて四海委（悉）く平定し、万民越楽して歓びの声は四方に響きける。

天正廿年の頃にして、殿下の公達、今年三才にならせ給ふ鶴松君、俄に煩ひ給ひ、終に早世し給いける。秀吉公五十余才に及び給ふに、初て始てもふけさせ給ふ男子にて有けるゆへ、大いに悦び給いしか共、其甲斐もなく、斯、頓に失させ給いければ、深く嘆き給い、夢か現かともだへ、御袖のかはく間もなかりしけるが、忽ち御心を取直し給い、

『斯迄なげき暮しなば、命も危うし。死したる者の帰るべき例なし。歎は愚痴の到也。されば、人間の一生は稲妻の光り、朝の露の如し。今日勇猛なるものも忽ち冥途の道に到る時には其音信もなし。我も五十に及ぶ上は今生の齢も限りあれば、昔より思ひ立たる事、遂ざるも残りおしき事なり』

と思召ければ、或時、五大老、五奉行、中老の面々、其外、諸侯を集め給い、仰出されけるは、

「我、今、四海をはらい清めて討所、勝ずといふ事なく、向ふ所伏せずと云事なし。然れ共、今、我朝には諸侯多くして加恩するに地少し。元来、日本は小

国なれば、我心の如く武功の面々に恩賞する事能はず。依て、是よりは朝鮮、大明迄も切なびけ、我者となし、我朝おば秀次に譲り、我は唐土四百余州を手に入て、大明の大王とならんと思ふ。此義いかに」
と仰ける。大老、中老、五奉行、其外諸大名、余りの事ゆへにあきれ果、
『我朝、太平の期なく、近頃漸々合戦やみ、太平に趣て、年頃の労を休むべきと思ふに、亦々はる〴〵の波濤を越て、見ぬ唐土に到りて軍せん事、扨々けしからぬ事かな』
と、忙然として口を開く者なし。時に五奉行の内に浅野弾正少弼長政、進み出て、古今の例を引て、さま〴〵諫申すといへ共、殿下、御承引なく、座中を急度見廻し給いけるにぞ、主計頭清正、諸将にぬきん出て言葉を発しけるは、
「我君の思召は時務に叶ふと申べし。昔、神功皇后、三韓を征伐し給いしより、彼国、日本に属し、夫より以来、代々貢を奉り、信使来朝したりしに、中頃に到り、武家の威おとろへしより自然と其義もたへたり。古きを起し、捨たる道を立るは将軍の矩模たり。今、往古の例を引て、先、差当る朝鮮を征し給はん事、理の到る所なるべし」
と、憚る所なく述ければ、座中の人々は只、酒に酔たるが如く也。
『殿下は長政の諫を用い給はぬ上に、今、清正が征伐を進め奉るうへは、迚も思ひ止り給ふべからず』
と、各〴〵一同に「御尤の御計略なり」とぞ言上しける。爰において殿下大いに悦び給い、是より九鬼大隅守に命じて伊勢浦にて大船をあまた造らせ給いける。
　斯て、正月五日、先陣の大将には加藤主計頭清正、小西摂津守行長の両人に命ぜらる。然るに、清正は殿下の御前に召出されて、朝鮮八ヶ道の絵図幷制札を給はり、曼荼羅の旗を給はり、
「此御簇を以て朝鮮国を委く切なびけて、倭朝の武勇を顕はし、大明迄も攻入て、大功を顕すべし」
と仰られければ、主計頭は拝領し、
「此御簇こそ先年、君いまだ筑前守にておはしたる時、播州において御勲功の後に、織田殿より拝領ありし所の法花まんだらの御簇なり。先例といゝ、彼是以て御吉瑞の御簇なり。是を真先に押立て朝鮮を切随へ、大明迄も乗いらん事、またゝくうち也」
と申ければ、殿下御悦喜なゝめならず、又、小西をも召出され、朝鮮の絵図に制札幷大黒と名付し、奥州立の名馬壱疋を与へ給ひ、
「是より両人、我に替りて彼地に渡り、随分共に武勇を顕はすべし」
と仰られければ、「畏り奉り候」と御請なし、御前を退出に及びける。此時、清正、次の間に到りて諸将にも有難き上意の趣を吹聴し、扨、小西行長に向ひ申けるは、
「某は拝領の旗をもつて朝鮮国に乱入し候はん。其元には何を印として討いり給ふや」
と尋ねければ、
「某は紙袋に朱の丸を書たるを大印とすべし」
と申ける。清正大いに笑い、
「左もあるべし」
と答へて退参せられける。是に依て行長、深く憤るといへ共、さあらぬ体にて同じく退散しけるが、此後に此事をいこんに思ひ讒言せし也。
　私に曰、清正よしなき言葉を発し小西と不和になりたるには非ず。清正は藤氏にて歴々の末葉たり。一旦零落するといへ共、侍の家也。行長は堺の木薬屋の悴にて素性いやしきもの也。去によつて此度の先陣、黒田、浅野、小早川など、同敷仰付らるべきに、小西と同敷先鋒たる事、心に叶はざる故に、少し不足の心にて斯申されしなり。又、「小西も面目にか、わらず『薬屋の看板を印にせん』といゝしはさすがなり」と、其頃みな人感じける。
　曰、小西は木薬屋にて度々朝鮮へ商売の為、行たるものにて、案内委敷故に遣はされたる也。依て、与力の面々有也。

加藤、小西、朝鮮渡海の事
　幷　釜山浦城軍の事

斯て朝鮮征伐として、主計頭清正は、相備、鍋島加賀守直茂、相良宮内少輔

長母等、都合弐万弐千八百余騎、又、小西行長は相備与力に宗対馬守 平 義智、松浦刑部卿法印鎮信、大村信濃守純長、五島大和守純玄等、都合三万八千余騎、両人一日代りに先陣に進む。三番手は黒田甲斐守長政、大友豊後守義統、壱万五千余人、四番は島津兵庫頭義弘、毛利壱岐守高橋九郎、秋月三郎種長、伊東豊後守祐長、長曾我部土佐守元親、小早川左衛門督隆景、浮田中納言秀家等、其外三万七千余人、五番は蜂須賀阿波守家政、生駒雅楽頭雅一、一柳侍従立花宗茂、筑紫上野介、広川安芸宰相秀元、八万五千余人なり。船手よりは九鬼大隅守嘉隆、藤堂和泉守高虎、脇坂中務少輔安治、加藤左馬介嘉明、菅平右衛門、桑山小平治。都合海陸にて十五万四千余人とぞ聞へける。

然るに清正は、肥前国名古屋にありて、城を経営す。縄張をしける間に、小西ははや朝鮮へ、一日の間に釜山浦迄着船なしける。清正は行長が乗船せし事を聞てけれ共、少しも驚く気色なく、心静に用意なして、跡より対州へ到りける。

小西行長、清正に一旦恥辱を怒り、先達て船を出し釜山浦に趣けり。朝鮮の船手に大将元均といふ者、番船を構へて小西と戦いしに、小西、無二無三に攻入ける故に、番船を奪い取て暫時に元均を迫ちらしければ、小西は安々と釜山浦を乗取、「清正に先達て功を立たり」と悦びける。

然るに清正はおくれながらに順風に帆をはつて、同敷釜山浦に乗入ければ、はや小西、元均が兵を破り、釜山浦の城を乗とりしとの事故、大いに残念に思ひける。併しながら、『我、此度は行長におとる共、朝鮮の王城に乗いり天晴なる功を顕はし申べし』と、心の内に励をなし、小西と談じ、「是より別々になり、朝鮮へ乱入すべし」といふ。小西、「此事然るべし」とて、直さま益山に趣し。行長は綏宜海道へと、軍勢を分て押向ひたり。

爰に海臨府の城といふは、後は高山をひかへ、前には峨々たる山岳聳たり。城将は素竜とて古今無双の怪力たり。両道より日本勢向ふよしを聞て少しも臆せずして、「日本の軍勢、いか程の事かあらん。十分に引寄せて戦はん」とぞ待懸ける。時に素竜、味方に申けるは、

「日本勢、剛強なりといへ共、案内を知らざる客戦也。味方は自国の主戦なれば、何百万寄たり共、破らん事いと心易し」

と、大木、大石を用意して静りかへつて扣へたり。清正は行長と両道に別れて進み、鬨の声を発し、無二無三に押寄ければ、素竜はしづまり返つて敵を近々と引寄、兼て用意の木石を雨のふるが如く投出し、散々に防ぎければ、両将も少し倦んで見へたりしが、行長の勢は余り唐人共を軽んじ、殊に此程の勝利にほこつて、何の用心もなく攻寄せしに、城中より厳敷突出し、かつ大木、大石の為に討れて先手に進みし逸雄の者共、大いに討れ、或は手足を損じ、右往左往に散乱しける。城中には是を見済して、大将元均、「時分はよし」と、逞兵すぐつて三千余人、城門を開き一度に噇と突出しければ、浮足になつたる小西が先手、一支もせずして散々にまくり落され、討死、手負余多なれば、大将行長、松浦等、味方を下知して踏こたへて防がんとすれ共、元均が勢は厳敷勢いに乗て討立突立追立ける故に、足も四度路に八方四面へ散乱せり。行長は牙をかんで下知をなし、敵を追返さんとすれ共、乱れ立たる事なれば、終に叶はず松浦勢諸共に崩る味方に引立られて敗走せり。

第廿五

開城府の城落去の事

幷　貴田孫兵衛、麻天麗を討取る事

此時、清正は開城府の城へ攻寄せけるが、城中堅固成事をしりたりければ、態と攻かゝらず、只鬨を発する計にて、主計頭、密に城の後なる高山に木村又蔵、斎藤立本、飯田角兵衛、井上大九郎、加藤清兵衛、新見藤蔵、山内甚三郎等、腹心の郎等に命じて、鉄炮を余多用意させ、「合戦半ならん時に、一度に本丸を目懸て打懸べし」と、相図をなし、其身は相残る郎等、諸卒を引具し、城門近く攻寄ければ、城兵等、大将の下知をうけて、堀際近く偽引よせ、大石、大木を以て打立んとしければ、清正、元来其用意ありければ、竹束きびしく押立て攻寄ければ、城中よりは五百人の精兵、弓を以て拳下りに射落しければ、清正、諸勢に下知して竹束を高くつみたれば、少しも矢にあたる者なく、次第〳〵に攻よせければ、城兵も防ぎ兼て、少し難儀に及びけるに、搦手の高山に廻し置たる木村、飯田以下の輩、「すはや、相図の時なり」と、件の鉄炮を城中へ打懸けれ

ば、本丸に残り止まりし軍勢共、大いに驚き、上を下へと騒動大方ならず。主計頭、此体を見るより、諸勢に下知して、「いざや進め」といふ程こそあれ、庄林隼人、赤星太郎兵衛、吉村吉右衛門、森本義太夫、大木土佐を始として、塀下に近付、一度に乗いらんとするを見て、相良宮内少輔長母が軍勢共、鍋島加賀守直茂が兵も進みかかりしかば、城中も是を破られじと火水になつて戦ふたり。此時、小西行長は益山にあつて、一旦敗軍せしが、再び攻登らんと評定する折から、東寧の方に鉄炮の音頻りに聞へければ、「扨は加藤勢、戦いを初めしと見へたり。然らば猶予する処に非ず。此方よりもおし寄べし」と、後陣の宗、松浦が方へも謀じ合、再び鬨をはつして先陣後陣段々に攻懸りければ、城中三方より攻立られ、今は高山より打おろす鉄炮に多く城兵打落され、右往左往に散乱し、はれも〳〵と敗軍すれば、城将素竜、元均も防ぐに術尽て一方を打破りて退きければ、加藤、小西が兵、勢いに乗じて追かけ〳〵討立けるによつて、討るゝ者数をしらず。両将も漸々と逃れけれ共、元均は余り手しげく追詰られて踏止りて戦いしが、終に加藤が勢の中にて討死せり。爰において城は即時に落たり。清正は城に入て軍を収めければ、松浦、鍋島、相良、宗対馬守等の諸将も追々に入城せられたり。小西も続いて本丸にいり、諸将に対面し、勝軍を賀し、清正に向ひて申けるは、

「今日の一戦に勝利を得たる事、全く貴将の謀による所なり。然れば、船手の軍には行長功をなし、山手の軍には貴将功を顕はし給いしなれば、是にて双方甲乙なし」

と申たり。され共、清正は少しも是を耳にかけず、あざはらいて、

「事おかしき行長の詞かな。朝鮮せましといへ共、八道の城々何ヶ所も有べし。かゝる城の一所ばかり攻落したり共、左程の功にも有べからず」

と申されたり。

夫より清正は城中の兵粮を開きて米穀をとり出し乱妨せり。扨又、壱ヶ所の蔵を開き見れば、此中におびたゞしく酒瓶を貯へ置たり。諸勢、是を見て、

「是は全く敵の謀事にて、毒酒たるべし。日本勢をみな殺しにせんとの謀事なるべし。必ず近寄べからず」

といふ時に、清正が家来木村又蔵、進み出て、

「此酒に毒ありとは何を以て申さるゝにや。証拠もなき事なり。某、一盃呑んで疑ひを晴し申さん。其上にて人々も聞し召候へ」

と、馬柄杓をとりて汲請、一口に呑んで舌打し、

「扨々銘酒かな。日本にても斯る酒は希なり」

とて、続けさまに呑たりければ、諸勢も是を見て、銘々に馬柄杓を以て打喰い、労れを散じける。清正、是を聞て、

「木村が仕方、尤なり。たとへ毒にもせよ、是を捨たると唐人共聞ならば、日本人は疑い深しと笑はんに、能こそ呑たり」

と称し給ひける。

斯て開城府の城も落入たりければ、平安道へと押寄せける。此平安道の城には布傷生といふ者籠りしが、此度日本の勢、釜山浦、開城府の城を落して爰へ押来るよしを聞て少しも恐れず、諸勢を励まし籠城に及びける所に、清正は軍を卒して早束に責寄て鬨を作り、一時にもみ破らんとしければ、城戸を八文字にひらきて、麻天麗といふ者、背の高さ八尺五寸にて、長き鉾をひねつて千余人を引卒し、真先に打て出、清正が簇本をめがけ突懸りければ、貴田孫兵衛宗治は紺糸の鎧に立浪の前立物したる甲を着し、五尺弐寸の太刀をさしかざして顕れ出て、麻天麗に渡り合、互いに声を励まして戦いしが、孫兵衛は聞ゆる勇士なれば、麻天麗が鑓を切払い、付入にせんと致しけれ共、奴も勇猛の者といゝ、鎗術の達者なりければ、突たてつき立、火花を散らして戦いける。孫兵衛、思ひけるは、『是は力量にて戦ふては手間取べし』と、偽り負て退きけるを、天麗は遁さじものと追かけ来る所を、孫兵衛、馬を返して又戦いしが、二合計り討合ける時に、孫兵衛、鑓を請流して払いける力に、麻天麗が鑓を切折たり。あわてゝ剣を抜んとする処をおがみ打に切たりしかか、哀れむべし、天麗は肩先より乳の下迄切下られ、馬より逆さまに落たりけるを、直に孫兵衛、首を取て差上たり。

吉村吉右衛門、明京を討事
幷　季仙、地雷の謀計相違の事

去程に清正が郎等貴田孫兵衛は天麗を討取たりければ、城中是を見て大いに驚

きたり。時に背の高さ七尺計もあらんずる大将、壱丈計の鑓をおつ取て、孫兵衛を討とらんと突懸る。是は麻天麗が弟、麗明京といふ者なり。吉村吉右衛門、是を見て、例の鉄の棒を引提て、「よき敵なり。いざや、首にして日本のみやげにせん」と、打て懸れば、明京も鉾を取て向ふ有さまは、面色は黒くして、髭は左右に生て、眼は百錬の鏡の如く、一声さけびて只一鑓にしてくれんと突て懸る。吉村は馬をまじへて鉄棒にて、みぢんになれと打懸る。明京は鉾の柄にて是を払い、直に付入にしてさゝんとする。吉村は身をかわして鉾をよけ、双方秘術を尽して争いけり。され共、互いにおとらぬ勇士と猛士、中々勝負は別らざりしが、明京が鎗法少し乱れて危く見へし処に、吉村はかさにかゝつて打けるに、人馬共に打すへたり。大力の吉村に打れし事なれば、さしもの明京、二言共いわず血を吐て死したりける。朝兵も肝を潰し恐れをなし、あへて近付者もなし。城将布傷生、是を見て、「迚も防戦叶ふまじ」と、其夜の内に後の山を伝いて逃失ける。主計頭、翌朝に到り、鍋島、相良の両将も押寄けれ共、城中さらに物音もなかりし故、「扨は逃失たるべし」と、塀を越て押いりけるに、人は壱人もなく、只、虫の声のみぞ残りける。「此城、斯、手もぬらさず落去せし事は、全く昨日の孫兵衛、吉右衛門が勇猛を顕したる故也」と賞美せられける。是よりして、忠清の城へと押寄たり。此忠清の城主といふは、朝鮮国王の一族にて李仙昇といふ者なり。五千余騎にて籠りしが、平安道の城落去しける事を聞て、「彼城落たる上は、倭勢、爰に向ふべし。然らば用意をなすべし」と、評儀なさん為に諸将を集めける。爰に剛石華といふ者、近々進み出て申けるは、

「今、倭兵大軍にて押寄来るとても、当城の案内をしらず。山岳の要害を守らば、何万騎にて寄たり迚も落る事有べからず。某に二千余騎をかし給へ。巨山の傍にまい伏なし、敵の軍勢半過るを待て、謀計を構へて打破るべし」

と申ける。李仙昇答へけるは、

「此事決して然るべからず。某が計略は巨山の細道に地雷を伏置て、日本勢をみな殺にすべし」

と申ければ、諸将残らず「李仙昇が謀事よろしかるべし」と一同しければ、是より地雷砲をふするの手配りをなし、「日本勢、爰を通る時に一度に火を移すべし」と、巨山の向ふの細道に夥敷焼草をつみて、山中の細道に百余人、火を付る者を谷底に埋伏させ、日本勢の押来るを今や〳〵と待居たり。

然るに此事を日本勢は夢にもしらず、平安道の城を落したるに気を得て、我もわれもと進みける処に、清正はるかに巨山の方を詠めけるに、山谷森々たる中に陽気一筋炎々と立昇りければ、鞍かさに立上りて、所の者を呼、此先の道を聞て大いに驚き、勢を止めて、

「巨山の道を伺ひし上にて通るべし。全く埋伏有べし。地利を聞に、細道にて兵を伏置にはくつけふの処也。壱人険阻を守る時には、万夫も行事能はず。時、今、一陽の気に到るといへ共、陽気いまだ地にひそまるの時なり。夫に陽気盛んなる事は、必定敵の防禦あるに疑ひなし。実否を糺し、兵を進むべし」

と下知しければ、鍋島加賀守、相良宮内少輔も軍勢を止めて扣へける。時に清正、此度朝兵を生捕し者、三百人計ありける中にも、手負て生難き者も多かりけるが、残らず縄を解て申渡しけるは、

「汝等、残らず誅すべきと思へ共、我、是を免し遣はす也。是より忠清道に帰り入べし」

とて、委く武具を着せて、既に亥の刻計に、みな追放したりければ、朝兵は大いに悦び、暫くも止るべきに非ずと松明をともして、案内しつたる忠清道の城へ我も〳〵と急ぎける。此時に地雷火の役人、此人馬の音を聞て、「扨こそ日本勢の押来るぞや」と、山に登り密に伺ふに、松明を以て軍兵押来る。「是は城へ夜の間に寄るならん」と、谷におりて人馬の音を聞て、「敵、思ふ図へ来りたり」とて、伏置たる火口をさし火なしければ、忽ち山谷鳴動して、火炎は一度に飛散りて、火薬は四方に満々たれば、哀むべし、彼の助られし朝鮮の生捕共、壱人も残らず此地雷火の為に委く焼殺されけるこそむざんなる。

第廿六

忠信道の城、落去の事

幷　清正、行長、手分争論の事

兵書に曰「必ず生んとする時は死し、死せんとする時は生る」とかや。

加藤主計頭清正は、只、忠誠一図にして、いかなる強敵も打破り通らんとの志し故に、天も其忠儀を感じ給いけるにや、忠清道の李仙昇が地雷火を伏て日本勢みな殺しにせんと計りしも、清正、自然と其気を察し、敵のもふけ置たる計略をくぢき、敵は倭勢を計りしと心得て、城中に帰りしかぐ〳〵の様子を語りける。

爰にかの降参の朝兵をゆるし遣す時に、清正と相備への諸将達、諫めて、

「生捕し朝兵を免し放ち給ふ事、子細あらん。なれ共、かれら城中に帰り、味方の様子を告時は、味方の弱みとなり、敵の為には強し。且亦、明日、敵方の案内は誰を以てせらるべきや。彼是以て、朝兵を免し帰し給ふ事、然るべからず」

と申ければ、清正笑つて、

「各の異見、尤なる事ながら、某、深き子細の有事なり」

と、安然として居たる処に、しきりに山谷轟き渡りければ、諸将は「扨こそ敵のよせ来るにや」と、みな驚きて身拵へするに、清正少しも騒がず、「今に各の安堵なし給ふしらせ有べし」といふ所に、兼て斥候に出し置たる清正が家来共、立帰り、

「只今、免されし降参生捕の者共、巨山の細道を通りける時に、谷中より火の手上ると見へしが、忽ち地中よりほのふ夥敷飛散りて、朝兵残らず死したり」

と注進しければ、清正完爾と笑ひ、

「我、此謀事あらん事を思ふ故に、生どりの者を悉く返して此火攻の難を逃れたり。今は少しも猶予すべからず。是より忠清道の城に押懸るべし」

と、用意なしければ、鍋島加賀守直茂、相良宮内少輔長母、大いに諫めて、

「今、味方、地雷の難を逃るゝといへ共、夜中に向はゞ、不知案内の味方といゝ、又計略に当るべし。夜の明るを待て進み給へ」

といふ。清正答へて、

「いや〳〵、左に非ず。朝兵は味方を地雷に殺したると心得、今宵は寄せべからず、と油断するは必定なり。明日にもならば、焼死せし者は味方ならぬ事を知る時には、又謀事をなすべし。兵は神速を尊むと申なり。早々向ふべし」

といふ。直茂、相良は臆してや、壱人も進む気なし。依て清正は、

「各は夜明て向ひ給ふべし。某は事に望んで見合せべきよふなければ、今宵押寄すべし」

と、手勢一万人、我も〳〵と巨山をさして走向ふに、何の子細もなく安々と打越て、夜の明方には忠清の城に押寄たり。

しかるに、彼の火付の者共、追々に走帰り、注進しけるは、

「日本勢、夜討と心懸しにや、今宵戌の刻頃、勢の多少は闇夜の事なればしらね共、巨山を押通る人馬を半ばやり過して、兼て御下知の如く火を懸ければ、地雷にもへ付て、山谷しばらく鳴動し、倭兵壱人も残らず焼死したり。此体にては、中々巨山を打越る事、思ひもよらず候」

と、悦び居ける処に、いつの間にか、日本の勢、城ぎは迄押寄たりけん、法花経の大旗を風にひるがへし、其勢壱万あまり、鎗刀旭にかゞやき、今責懸らんとする体なれば、城中には大きに驚き、魂を飛し、「夜前討たる日本勢、恙なく爰に来りしぞや」とふしんはれやらず。只、あきれたる計なり。此時、鍋島直茂、相良長母が勢もおい〳〵巨山を打越て、城外に押寄せければ、城中はいよ〳〵舌を巻て恐るゝ計なり。

此時、小西摂津守は黄海道の城を攻て、三日が間にせめ落しければ、

「清正の責懸りし方はいかゞあらん。我等は是より外の城へ攻懸るべし」

と、与力の面々へも評義なしける。

扨、忠清道の城中には力をおとし、今は防ぐにも心置れて、はか〳〵しからねば、夜にまぎれ城を開き、王城さして退きければ、清正、即時に城にいり、続て忠州に到りければ、行長も此所にて清正に対面し、互いに勝利を賀し、夫より諸将等集りて軍議に及びける。時に小西行長、清正に向いて申けるは、

「是より王城に向ふべし。併ながら王城への道二筋あり。慶尚道、全羅道とて両道の内、いづれにても鬮取にして、貴殿と我等、一方づゝに進むべし。尤、慶尚道は王城の東の門に到る。其道法十里遠し。全羅道は西大門に到り、十里近しといへ共、大河ありて容易に渡り難し。何れにも鬮をとり向ふべし」

といふ。清正、あざ笑いて、

「子供のたわむれに似たる鬮取せんより、何れの道にても貴殿の難儀に思はるゝ方より我等進むべし。若亦、両方共に難義に思はれなば、双方共に承るべし」

といふ。小西、大きに怒り、
「いかに清正。日本出陣の折から殿下の仰にも『両人申合て計ろふべし』と仰出されたるを忘れしや。某は殿下の命を重んじ、斯、評義なすに、疎忽の返答は行長を嘲弄するや。今一言申なば、其座は立せじ」
といふに、清正笑つて、
「行長には殿下の御下知を守り給ふならば、いかでか日本出船の節にも抜懸し給いしにや。又、其許の士卒残らず多くの布を分捕、乱妨せり。是より王城にいるならば、金銀珠玉に眼をくらまし、合戦の事はか〴〵敷有べからず。主計頭、不肖ながら一命を的にするゆへ、宝を見ても石瓦の如し。士卒、雑人に到る迄みな此心也。只今の雑言奇怪なり」
と申にぞ、行長いよ〳〵怒り、太刀に手をかけ、其座をたゝせじと詰寄ければ、主計頭、大いに笑ひ、
「大事の前に到つて切刃廻はすは人そばへなる振舞なり。左よふの馬鹿を相手にする清正に非ず。よしなき事をせらるゝな」
と、ゆふ〳〵として居ければ、行長はます〳〵怒り、既に抜放さんとするを、鍋島、宗等押止め、「まづ〳〵鎮り給へ」と制しける。

小西摂津守奸計の事 幷 清正察智、大河を渡す事

両雄は並び立ずとの古語、むべなる哉。
清正、行長、互いに武勇を励む心よりして詞戦いとなり、既に乱に及ばんと見へければ、鍋島加賀守、松浦刑部卿法印、宗対馬守等、双方を鎮め、
「両将の詞、みな君に忠儀を思ひ給ふが故なり。よつて慶尚、全羅の両道より向ふ闘を出すべし。是を以て向ひ給ふべし」
と申けるにぞ、両人、此義に随い闘を取りしに、主計頭は慶尚道、行長は全羅道に当りけり。されば清正は、元来勇剛の将なれば、安き方に向ふ事を好まず、「行長とふりかへて全羅道の方、大河ありて難所也との事。此道より進みたし」とのぞみけり。爰において行長、又々怒り、又候事に及ばんとせしか共、小西が縁者、宗対馬守義智、大きに制して、「清正が望みに任せ、全羅道を譲るべし」と、理をまげて諫しゆへ、行長も是非なく闘をふりかへて、行長は慶尚道へと進みけり。
清正は行長と大いに争論し、全羅道より進みけるに、当地より王城への案内なければ、宗対馬守へ「通辞壱人を差越るべし」と申遣ければ、対馬守「心得候」とて、徳右衛門といふ通辞を遣しける。此徳右衛門といふ者はどもりにて、其上、全羅道の道へ到りたる事はなき者なり。元来、宗対馬守は小西が舅なる故に、かゝる不通なる者を主計頭に与へけるなり。全く行長と示し合せたる奸計なり。しかのみならず、小西は木戸作右衛門、日比佐五右衛門といふ者共を全羅道に遣はし、彼大河の船共、悉く流しける。清正が武勇を行長妬て恥辱を与へんと計らいける。木戸作右衛門、日比佐五右衛門の両人は此道の案内者を召連れて、閑道を経て彼大河に到り、舟筏共をことごとく切流して、清正王城に到る事能はざるよふに計らい、又、閑道を経て、早々小西が陣へ帰りけるが、兎角に主計頭に不覚をとらせんとぞ計らいける。
去程に清正は、斯る企あり共しらず、初の如く鍋島、相良を後陣に随へ、清正の先手、飯田覚兵衛、庄林隼人、五千余騎にて既に彼大河に到りけるに、此方の岸には舟一艘もなく、向ふの岸迄五十町計もあらんと見へけるに、白波天に聳へ、流れの早き事、矢を射る如く、『いかゞせん』と思ひ煩いけるが、此由、先、清正に告たりける。清正少しも驚く気色なく、彼河に到り向ふを見れば、楯を突立、其影に物の具せし武者弐、三百人扣へたる体なり。「扨はかれは敵の防ぐ勢なるべし」と、よく〳〵見れば大船弐艘あり。かの武者は渡る敵あらば射落さんと扣へし体に見へければ、清正も『いかゞせん』と暫し工夫に及ばれける処に水鳥二、三羽、彼楯のあたりを飛廻りて、あなたこなたと蹇り歩行を見て、清正完爾と笑い、
「扨は向ふの防ぎの勢と見得しは、人にてはなし。朝兵共、王城へ退く時、此大河を渡し、跡より日本勢を渡すまじと謀事をもふけて木偶を拵へ置たるなり。少しもあやしむべからず」
とて、「此川を渡り、向ふの船を奪い来るべし」と下知しけるに、木村、貴田、

森本等の面々、少しは水練もなすといへ共、斯る大河なれば、誰人にも這入べき者なし。彼徳右衛門に銘じ、船筏を求めさせるといへ共、彼は一向愚鈍の通辞たる故に案内は知らず。清正は爰に到るといへ共、空敷河の面を詠め居るより外はなかりける。時に元上杉家の浪人たりし杉本伝次郎といふ者、進み出て、

「某、此川を渡りて瀬ぶみ仕らん」

といふより早く鎧ぬぎ捨、手綱を腹帯とし、短刀を腰にたいし、さしもにうづ巻し早川に飛入て難なく向ふへ押渡り、見るに清正が推量の如く、楯を並べ藁人形を並べ置たり。其近所の家へ入て見るに、人壱人もなし。依て伝次郎は彼船の縄を解てこなたへ乗来り、さしもの軍兵を委く渡しける。此時、清正、杉本伝次郎に鎧と甲を恩賞し大に賞しける。

私に曰、木戸作右衛門、日比佐五右衛門の両人、多く繋ぎたる船を切流しけるが、此両人、船弐艘に取乗り、向ふへ渡し、何がなしに清正をたぶらかさんとわら人形を数多拵へ、此度奪し武具を着せて立置たる也。是にては清正、王城へ進む事あとふまじとの結構なりけれ共、清正が為には却て供福とぞ成にける。後に行長、此事を聞て残念に思ひ、木戸、日比を叱りけるとぞ。

第廿七

北令流人、両皇子を欺く事

幷　清正、北嶺に向ふ事

爰に朝鮮の国王李眼は、倭国勢大軍にて渡海し、釜山、平安、忠清道、慶尚、全羅等に到り、城々を責落し、王城に押寄来る事を大きに驚き、元来臆病の諸官人、我も〳〵と逃失ければ、中々是にては敵する事あとふまじとて、李眼は大明をさして落失給ふ。太子臨海君、順和君は兀哈喰をさして落させ給ふに依て、王城は空城の如く、山谷に身を隠さんと、我もわれもと逃失ける。其騒動いふ計なし。

然るに、清正は仁義正敷大将なれば、殺伐を好まずして、只、民、百性をいたわり、一人も殺す事なくして道を通りければ、安々と五日にして王城に趣く事を得たり。小西行長は元来勇剛を頼みにして、仁慈の事は少しもなく、百性、町人の別ちなく、朝兵と見ると忽ち切殺しける程に、行長が通りし跡は死骸の山をなし、血は流れて川の如し。見るに哀れを催しける。此故に、多く当国の民を失いしも、全く行長が奸曲なりしとかや。依て、王城へは清正より一日おくれて着しける。

去程に、清正は小西を待合せて城に攻か、り、大手搦手より鬨を作り、責寄けれ共、王城はひつそとして敵あり共見へず。行長は大いに疑ひをなして、『是、謀事ならん』と億しける。清正は是をあやしとせず、「扨は城中に敵はあらじ。乗入や」と下知しければ、飯田角兵衛、井上大九郎、吉村吉右衛門等、我も〳〵と塀に取付て城中へ入るに、壱人も人無りし故に、主計頭、城へ入ける。是を見て日本勢、我も〳〵と入りけるに、「国王を取逃したるこそ残念なれ。此上はいかにもして跡を追かけ、大明迄も押詰て生どらずんば有べからず」と、王城を別れて、是より清正、行長と南北に引分れて追行けり。

斯、王城だに落去せしに依て、朝鮮の民、百性等は日本勢の猛威を恐れて、城をすて郡を放れて退散しければ、清正はやす〳〵と打通り、既に安辺といふ処迄来りしに、都を出て十六日なれ共、国王、太子にもいまだ逢奉らず。依て大いにあぐんで居たりける。

此時、太子臨海君、順和君の両人は女官幷に官人を召具し、馴し都を跡になし、歩行やはだしにてあわたゞ敷落出給ふに、松吹風も『日本勢の追来るにや』と、心細くも兀哈喰をさして落玉ふ。

爰に北嶺といふ処あり。是は朝鮮国を放れし島にて、流人を遣す所也。此島の流人打寄て申けるは、

「我国へ日本勢入来りて、王城既に乱れ、帝を始め太子にもみな都を落給ふと聞。我々元来いさゝかの罪ありとはいゝながら、斯放れ島に流されて、かゝるうきめを見る事、思へば口惜き事なり。依て、此乱を幸いに、此処へ落来り給いし皇子を欺き、此所へ迎へ、日本勢に使を遣はして是を献じなば、恩賞として本国に帰り富貴の身となるべし。此事いかに」

といふ者ありければ、其外の者共、是を聞て大いに悦び、「究竟の事なり。急ぎ計い給ふべし」とて、「太子を此方へ迎へ奉るべし」と、頓歴といふ者を使として、

両皇子の方へ申遣はしけるに、皇子悦び給いて、
「兀哈喰へ退く共、日本勢、当国の者を案内として追来候べし。然る時は中々以て叶ふべからず。北嶺は放れ島にて人跡も絶たる栖家なれば、知る者希なり。暫く島に隠れ居給ふものならば、御命は全たかるべし」
と申にぞ、臆病神の付し諸官人共、此事をひたすらに両皇子に進め参らせければ、まだいとけなき皇子たちなれば、
「兎に角、臣等よろしく計らい、再び帝に御対顔あるべきよふに計ふべし」
と仰けるによつて、則、北嶺に逃のび給ふに義定し、官人百余人、両皇子を守護して北嶺に趣き、城中に入ければ、流人共、「謀計既に成就せし」と一所に集り評儀なし、金桓といふ者に書翰を持せ、長橋府といふ所迄遣はしける。
　時に主計頭清正は、十六日迄も王城を放れて行といへ共、官人さへも見へざる故に、
「扨は小西が手にて両皇子を生捕りしにや。扨々残念なる事也」
と、心ならずも進む処に、長橋府といふ処迄来りしに、道の傍に壱人の唐人、手をつかねて伏し居たり。木村は是を見て通辞を呼んで「これは何事ぞや」と問に、「降参のものなり」と答へし故、又蔵、則、此者共を伴ひ、清正が前に出ける。時に唐人申には、
「某は北嶺の流人なり。此度、朝鮮の両皇子、兀哈喰に落行給ふを、欺て我々が島へ偽引寄たり。はやく来りて生捕給へ。其代りには、我々を本国へ返し給はるべし」
といふ。清正、大に悦び、『天より我に功名をあたへ玉へり』と心中に悦び、
「いかに、汝等が望に応じ、本国へ返し過分の恩賞を遣すべし。いざや、案内すべし」
とありければ、畏りて先に進みたり。時に鍋島加賀守、大いに制して曰、
「是、全く日本勢を欺て討とらんとの計略なり」
と申。清正あざわらい、
「虎穴に入ずんばいづくんぞ虎子を得ん。今、太子の在家をしりたるは、日本諸神の告給ふ所也。我、両皇子を生捕て行長に増りし功を立んと存るなり。各、左程に疑給はゞ、某壱人にて参らん。敵国に入て功をたてんとするに、等閑の事にてはなるべからず」
と答へて、鍋島を長橋に残し置、清正は手勢を引卒し、金桓を先に立、北嶺をさして向ひしは、危も又いさぎよし。清正、元来敵の勇猛なるを恐るゝ事なし。夫より清正は長橋を放れて、亦十日余りにして漸々かの島にいたりければ、清正が郎等共、大いに労れ、『いまだ虚実もしれぬ敵国に、かよふに深入する事とも心得ず』とは思ひながら、是非なく進みけり。

清正、北嶺にて両皇子を生捕る事

幷　森本、貴田、争論の事

将、勇ならざれば、諸卒鈍し。清正が勇威に励まされ、北嶺にいたり、既に十日余りをへてかしこに着ければ、金桓、城中へ入て此由を告ければ、流人共申けるは、
「何分、かの大将より、我々安堵の書を請取、其後、五、六人にて城中へ請じ給へ。其時に太子を渡すべし」
と申ければ、金桓、其趣を清正に告ければ、清正完爾と笑い、「扨は我を疑ふにや」と、即時に安堵の書を渡しける。飯田覚兵衛、是を制し、
「是はいかなる軽々敷御振廻ぞや。若、城中に謀ありて、大勢に取囲るゝならば、由々敷大事なり。しかのみならず、倭兵の弱み共、相成事なれば、よく〳〵御思慮を廻らされ然るべし」
と申ける。清正答へて、
「たとへ城中に群る敵何万あるとても、我、是を見る事、蠅虫の如くなり。恐るゝ事なし」
とて、森本義太夫、木村又蔵、貴田孫兵衛、井上大九郎、斎藤立本、飯田覚兵衛、纔か七人を召連れ、軍兵は城外に残し、しづ〳〵と城中へ入ければ、城中の者共、主計頭が有様を見て大きに驚き、『扨は我々を殺す為ならん』と、銘々に弓を取て、清正を中に取こめ射落さんとなしければ、飯田、木村等、『扨こそ身の一大事なり』と、大いに驚き、
「何故か、る狼藉する」

とよばわりければ、日本詞にて通じ難き故に、敵は既に矢を射んとする。清正少しも恐れず、腰の印籠より印形を取出して見せければ、みな〳〵驚き、弓矢を捨て地に拝伏しける。金桓は其印を取て三度頂き、紙を出して押、人々に与へ、夫より本丸と覚しき所に伴い、臨海君、順和君の両王子を渡しければ、清正、大いに悦び、両皇子に対面し、夫より通辞を招き、渡部金太夫に命じて書をかゝせ、

「必ず恐れ給ふな。主計頭、斯受取参らせたれば、両皇子の御命に恙がなし」

と申なだめければ、王子達を始め諸臣女官の面々、大いに安堵し、清正が仁慈を感じ給いける。

夫より此由を、急ぎ日本肥前名古屋の御本陣へ注進しければ、殿下大いに悦給い、「主計頭が軍功、他に勝れたり」とて、御感状を給はり、使者にも黄金、太刀等玉はりける。

私に曰、清正北嶺に到つて両王子を生捕りける由を聞て、行長大いに残念に思ひ、『我千辛万苦の軍労も清正に越られ、空敷成し』事を憤り、清正を殺さんとぞ計りける。

斯て主計頭は、北嶺の者共を随へて尋けるは、

「是より兀哈喰の都迄、道程何程ありや」

金桓答へて、

「是より十里あり。都迄行道に燕丹といふ城あり。此城に普天といふ大将籠れり」

と告ければ、

「然ば先、此城を攻落し、直さま都に乱入すべし」

と、北嶺の降人五百余人に、みな南無妙法蓮華経の笠印を付させて、案内者として燕丹の城に進発しける。

城主普天は此由を聞て大いに怒り、「日本人、斯寄せたりとて何程の事あらん」と、万弩をふせて壱人も残らず打殺さんと委く用意なしける。抑、此万弩といふは一度発する時は、矢百筋づゝ発して敵を破る。是、此国の兵器也。普天は矢倉より寄手の来るを今や遅しと待懸たり。

清正は先、城外はるかに陣をすへて、「明朝敵城に向ふべし」と、心静に兵粮をつかひ、其夜は捨篝りを焚て休息しけるに、清正、酒をとり寄て一族郎等に呑せ、

「明日は早く軍を発し、燕丹の城を乗取べし。斯並びたる十虎の勇臣等の内、誰か壱番に城を乗るべきや」

とありければ、森本義大夫進み出て、

「某こそは明日の一番乗を仕らん」

と申ければ、貴田孫兵衛、是を聞て打笑い、

「扨々、足下は傍若無人の事をいふ人かな。此孫兵衛を差置て一番乗をせんとは片腹いたき事なり」

といゝければ、森本大いに怒りて、

「纔計の力量を頼み、人もなげなる事をいふ馬鹿者、一番乗など思ひもよらず。先、試に我等と力をくらべて、其上に明日の合戦に向ふべし」

といふ。貴田孫兵衛、居丈高に成て、

「汝、我と力をくらべんと思ふかや。やさしき事なり。いでや、望に任せてつかみ殺して呉ん」

と、立上りければ、森本も立上り、太刀を以て向ひける。時に飯田、斎藤、木村が輩止めけれ共、一向に聞入ず、既に大事に及ばんとするにぞ、清正、両人を制して、

「汝らは何事をなすにや。明日の軍の評儀はせずして口論をなし、我前おも憚らず尾籠の到り也。今、爰にて論ずる事をやめて、勝手次第に壱番乗をすべし。今、互いに争論し差違〔へ〕て死するが本意なりや。疎忽至極」

と申されければ、両人は平伏して退きけり。森本、貴田両人は、『あすの合せんにいさぎよく討死して、武勇を外国に残さん』と心中に思ひ究めて、又、酒宴に及びける。

斯ておの〳〵退散しけるが、貴田孫兵衛は我陣に帰ると其儘腰兵粮を用意して、手勢わづかに三十余人、孫兵衛が出立には白糸威の鎧に、金梨子打の甲に、去年殿下より拝領せし猩々緋の陣羽織を着し、連銭葦毛の馬に打乗て、角取紙の指物して、いまだ寅の刻にも到らざるに、城際近く進みける心の内こそいさま

しけれ。

〔第廿八〕

貴田孫兵衛抜懸戦死の事
幷　清正、兀喰哈へ乱入の事

去程に、貴田孫兵衛は森本儀大夫と争論し、『我一番乗をなし、義大夫に鼻明せん』と、夜深に打立て燕丹の城に押寄せ、城外にて大音揚て、

「日本国に鬼神と呼れたる加藤主計頭が家来、貴田孫兵衛宗治といふ者、死を決して爰に来り。当城を乗とらんと思ふ也。早く城門を開くべし」

と再三呼われば、城兵等は是を聞て、

「扨々、日本勢は夜深に軍を催ふす。見れば小勢なり。捨置べし」

と、城中鳴りを静めて居たりければ、孫兵衛怒つて、

「何故に討出ざるぞ。但し、我壱人を恐るゝや」

とさま〴〵申れ共、日本詞ゆへ通ぜず、詮方なくぞ見へにけり。然る所に、卯の刻に及びける時、森本義大夫、是も手勢廿余人にて抜懸し、『まだ孫兵衛は来るまじ』と馳付けるに、くらまぎれに三十余人の兵扣へ居るを見て、義大夫驚き、「扨々、夜深きに出たるもの哉」と、笠印をみれば味方也。「誰なり」と尋れば、孫兵衛は打笑い、

「さいふ汝は森本なるべし。能も早く来りたり。後陣にありて、某が一番乗をするを見物せよ」

と申ければ、義大夫もともに打笑い、

「汝、我等が働を見物して後学にせよ」

と、互いににらんで扣へたり。程なく夜もしら〴〵と明渡りければ、城兵共、余りに小勢にて向ひしをあなどり、「城中より打出て踏ちらせ」と、普天が臣、微林官、背の高さ八尺、力量も人に勝れしが、千余人にて城戸を開き、一度にどつと打出たり。待もふけたる貴田、森本、少しもひるまず太刀をかざして突懸れば、微林官が兵も勇を励まし、切先より火花をちらし入乱れて戦ひければ、孫兵衛は四尺五寸の太刀をふりて微林官に切て懸る。かれも知れ者、剣をもつて両人大いに戦ひしが、互いにおとらぬ勇猛なれば、更に勝負も分らざりし。時に微林官、何とかしたりけん、剣を鍔ぎはより打おられ、『今は叶はじ』と引処を、孫兵衛追かけて拝み打に切付しに、真只中を切付られ朱になつて失たりければ、大将かくなりければ、我も〴〵と乱れ立て城中へと逃入たりければ、付入にせんと貴田、森本、五十余人にて追かけ、もみ合しに、早くも城兵は城戸を打ければ、両人大いに怒り、此虚に乗つて責破らんともみ合〴〵せり合て、城の塀に取付しに、城兵等は小勢と思いの外、剛強なる働なれば、大きに胆を潰して、「爰にこそ兼てもふけ置し万弩なり」と、一度に八挺を打立ければ、何かは以てたまるべき、貴田が軍勢一度に廿人、此矢にあたり、孫兵衛も身に立たる矢は簑毛の如く、壱人も残らず死したりけり。森本義大夫是を見て、「憎き敵のもふけかな。いでや朋輩の敵、目にもの見せん」と、かけ向はんとする処に、清正は森本義大夫、貴田孫兵衛が抜欠せし事を聞て大いに驚き、「早く欠向ひて押詰べし」と、壱万余人、急に進み来るといへ共、城中より万弩を打出し、進む事なり難く、其日の軍は終りけり。清正は孫兵衛が戦死を聞て大いに歎き、死骸を厚く葬り、帰朝の後、孫兵衛が弟孫三郎を呼出し、本領をあたへ、家を相続させける。

扨、清正は心を砕き、「何卒して攻落しくれん」と、再び燕丹へ押寄ける。然れ共、普天、例の如く万弩を放ち防ぎける故、中々近寄る事あたわず。『いかゞせん』と案じけるが、城の後は甚だ嶮岨にて、岩石そばたつたる高山なれば、清正、北嶺の案内者を呼て、「此山の案内すべし」とて、赤星太郎兵衛、鵤平治、加藤清兵衛、木村、新美、井上等に命じて、皆かなてこ、玄翁を以て後の山に登らせ、「岩石を落し懸、城へころばすべし」と下知し〔け〕れば、此者共畏つて案内者を先に立て、彼山に登りて大岩を打砕きて城中へ落し懸ける故に、城中大いに騒動して、是を防がんとすれ共、中々人力に及ばざる石ともなれば、大きに迷惑して込りける。此時、清正は山林より大木の枝を切出し、是を竹策（束）となし、万弩を防ぎ仕よせをつけて、我も〴〵と進みければ、城中は前後の敵に辟易し、一方をひらきて逃出ければ、清正は是を追ふの勢いをなし、終に城中に乗いりければ、山手の者共、城兵の退くを見て、みな〴〵麓におりければ、清正も軍を治めて城中に入て、万弩を奪取て、其夜に爰に休息し、「兀哈喰の都に

は明日押寄べし」と扣へける。
　され共、此兀哈喰の都は、朝鮮の王城よりは格別に広く、軍勢も数万扣へければ、うかつに責入事もなく、四方の山に毎夜〳〵松明を灯して奇兵をなして、夫より夜討、朝がけにて八方より向ふ体にもてなしければ、兀哈喰の軍勢、是に肝をひやし、昼夜安き心もなく、「かよふに毎夜篝を焚、松明をともしつれて八方より攻る体をなすは、城中の油断を伺ひ、壱度に責る謀計たるべし」と、魂を失ひ、都の内に足を留ず、抜々に落失ければ、国王麻吉王大いに驚き、「都の内に居る事能はず」とて、百官を伴ひ、急に都を退散して、忠清道の方へ落失ければ、清正、早速に都に乱入し、片はしより火を付て焼立ければ、火炎は風に随いて、さしもに広き兀艮喰の都、しばしが中に灰尽と成にけり。是より清正、又々元の朝鮮国貴角といふ処へぞ帰陣しける。是より東の方、清州といふ処へぞ向ひける。

清正、桂留主を生捕る事
幷　小西行長奸計の事

抑、朝鮮に四道将軍といふ者弐人あり。四道将軍といふ号（ママ）は、朝鮮は八道也。忠清、慶尚、平安、黄海、金羅、江原、威鏡、京畿、是なり。此中、忠清、慶尚、金羅、京畿の四道をば、牧曾将軍といふ者、是を司り、残りの四道をば桂留主壱人にて是を守る。両人共に智勇兼備の者にして、要害の地に城廓を構へ、厳重に守りけれ〔ば〕、中々以て落去すべきにあらず。
　爰に主計頭清正が向いし清州は、桂留主が持場なり。然共、清正は北嶺の堺城にて両王子を籠置し事なれば、清州を責なびけて後に彼所に到らんと思ふが故に、此処へ押寄たり。然るに城は要害なれ共、不思議の事には堀には水まん〳〵たれ共、新らしき橋をかけ置たり。清正、是を見てふしぎに思ひ居らるゝに、森本義大夫、加藤清兵衛、木村又蔵なぞは、「橋の懸有事、是、究竟の事なり」と、爰より城に乗いらんとするを、清正「暫し」と制し止めて、
「是、必、敵の謀計成べし。我々破竹の勢いにて敵を破るに落ずといふ事なく、夫をしりながら明らかに橋をかけ、門を開きて待懸しは謀計ありと覚へたり」
といふ。飯田角兵衛申けるは、
「是は全く敵、危急にせまりし故に、斯なし置けるは、諸葛孔明が仲達を破りし計略にひとしき也」
といふ。清正申けるは、
「いや〳〵、必ず攻いる事、無用なり」
と、諸卒を下知する処へ、城中より桂留主、三千人の逞兵にて橋を渡りて清正の陣に切ている。鵤平治、斎藤立本、吉村吉右衛門、飯田覚兵衛等、散々に戦いければ、城兵、何かはたまるべき、右往左往に乱れ立て城中へ逃いるを、味方進んで付入にせんとす。清正制して鉦を鳴し軍を引揚んとす。時に木村九兵衛、鉦を聞そんじてや、百余人迫すごふて城中へ乗いらんとする処に、此橋へ懸りければ、今迄丈夫に見へたる橋たちまち砕け、堀の中へ落入ければ、日本勢は水におぼれて散々の体なるを、城中より是を見て矢狭間をひらき、矢炮を飛しければ、味方討る、者数をしらず。此内、木村も討れけり。是は浮橋と号して、四道将軍の謀計なり。さればこそ清正、味方を制して進まざるは斯る術もあらんと察してなり。清正、浮橋の為に味方を討れ残念に思ひ、『いかにもして此恨を散ぜん』と昼夜工夫を廻らしけるが、一ツの謀計をもふけて、木村又蔵、吉村吉右衛門、鵤平治等に命じて謀計を教、其後、日本勢は周章て後陣より崩れて退きける。城中より是を見て大に悦び、
「今、倭軍の退くは兀艮喰の賊共蜂起せし故に、夫に恐れて退くと見へたり。さもあるべし。然れば城中より突出て追討にすべし」
と、城門を開き、五千余人さん〳〵に追欠ければ、日本勢は一支もさゝへず、さん〳〵に成て敗走しければ、将軍桂留主は大いに気を得て追欠しに、許甫といふ処迄追入りしに、日本勢は山を廻り、谷を伝いて逃失ければ、桂留主大いに笑い、
「倭軍をみな殺しにすべきは此時なり。渠等は地利をしらずして、道を失ふ。我兵は案内を知りたれば、本道を廻りて日本勢の先へ通り、壱人も残らず討取べし」
と、本道の方へ趣し折から、ふしぎや、清州の兵を和軍大いに取巻、万弩を発して討立ければ、桂留主大いに驚き、
「扨はたばかられしか。残念なり」

と、逃れ出んとすれ共、出る事あたはず。討る〻者数をしらず。漸々桂留主は一方を切ぬけて逃行所を、吉村吉右衛門、鵤平治、追かけ来り、熊手さすまた等を打かけ引落し、終に生捕たり。清正は四道将軍を生捕り城中へ押寄けるに、みな〳〵恐れをなして降参し、城を渡しければ、城には火を懸、焼尽し、夫より威鏡道の城に帰陣し、両皇子にまみへ奉りければ、清正が勇烈なるを恐れ、朝兵等は委く降参せずといふ事なし。去れば是より清正は軍勢を引連れ、吉州へ入ければ、鍋島、相良の面々も長橋府より爰に来りて、清正の武勇の程を感美しける。

扨、夫より切取りし国郡へ人数を分、其身は平安道に新城を築ける。先、吉州には加藤清兵衛、片岡右馬允、永野三郎左衛門、山口与兵衛、片岡伝兵衛、原田五郎右衛門、天野助左衛門を差添て、近藤四郎左衛門、岡田善左衛門、佐々平左衛門、室田主税、丹鯨には加藤与左衛門、九鬼四郎兵衛、出田宮内、井上大九郎、臨泉には小代下総、大脇二郎右衛門、長尾安右衛門、寧辺には吉村吉右衛門、堤権右衛門、双河には多田茂左衛門、並河金左衛門、合軍には坂川忠兵衛、和田備中、大木土佐等を差置ける。斯如く手配りなして、其後清正は平安の城に居して猶、民を撫育しける。其年は爰にて春を迎へ夫よりして伝奏館を打破りける。是等の事共一々日本へ注進有ける。誠に此度の軍功は主計頭壱人に止まりける。

爰に小西行長は、大明の援兵と数度戦ふといへ共、清正が如く比類なき武勇はなし。され共、亦、小西が軍功もしば〳〵あれば、兎角清正と不快にて、

『我、外国に来つて抜群の働をなすといへ共、清正が功におとる事、心外なり。同じ先陣を蒙りながら、劣る事こそ安からね。兎に角、主計頭を罪に落し、我功を高くせん』

と、昼夜心をくるしめける。然るに中納言秀家、石田三成等と交り深かりしかば、『是によりて事を計らん』と思ひけるに、幸いに両人も釜山浦の城に在ければ、爰にいたり何かと談じける。時に清正も爰に来りて秀家、三成に対面しける。時に三成申けるは、

「今、大明の援兵百万の勢を引て、麻貴将軍、開城府に屯する。鴨緑江よりして兵粮を多くこき入、武器等夥敷、今、開城府に運び入るよし、委く入らざる先に是を打破らば倭軍の愁いなかるべし。清正、急ぎ発向あるべし」

といふ。清正少しも辞する事なく、開城府に向ひける。

扨、小西は清正出陣の後に両人へ申けるは、

「一旦大明と和睦して日本勢を引上ん」

と言。是は表向は日本の勇気を顕すといへ共、元は偽りを以てする、沈意敬と小西との密談なり。此事みな悉く奸謀なり。和談に及ぶ時は主計頭が大功も無に成道理にて、行長が功莫太に成るに依てなり。元来、浮田、石田等は交情厚き故、此事を密談するにぞ、浮田、石田等も臆病の心生じ、

『今、大明の援兵百万騎とあれば、たとへ日本勢、勝とても五、七年も爰に在陣せずんば全く平均はすまじ』

と思ひければ、三人合体して、「和睦の事よろしからん」と日本へ注進しける。其荒増は、「日本と大明と好身を通じ大明の幕下とならんとの事、然る上は朝鮮の両皇子をも帰すべし」など、大明へ申送り、又、日本の殿下へは「此度朝鮮を日本勢きり取し処は日本へ貢献し、大明皇帝と秀吉公を仰ぎ奉るべき旨、是によつて両皇子を助返し玉はるべし」とぞ言上しける。殿下はか〻る奸計とは夢にも知り給はず早束に御承引あり、「申越る〻条々に相違なきに於ては朝鮮の両皇子を恙なく返し申さん」と書を認させ、柳川但馬守を御使として朝鮮へ遣はされける。

あゝ、恐るべきは人心なり。須臾に善悪をかへす事、昔のみにあらず。慎むべし。

第廿九

清正、麻貴将軍を討事
幷　明帝より勅使の事

扨も主計頭清正は、吉州平安にあつて軍儀をなす所に、小西行長、大明の援兵の為に大いに打負、都に引退きけるゆへ、朝せんに有し諸将、大いに恐怖し、急ぎ清正を招きけるゆへ、清正取て返し都に到りければ、兵粮にこまり困窮に及びしか共、辛ふじて処々の大敵を打破り、爰に来られける。

時に先頃とりことせし四道将軍桂留主をば、津田与三郎に預け置し処、いかゞしたりけん、抜出たり。与三郎は既に切腹に及ばんとしけるを、主計頭大に制して、

「何条左様の事あるべき。桂留主は勇なりとはいへ共、鼠輩なり。又も生捕るべし。与三郎は織田殿のゆかりといゝ、いかでか切腹に及ぶべし」

とて、是を止め、少しも怒る心なし。

扨、都に到りければ、諸将等申けるは、

「大明の援兵に小西行長を初、何れも敗軍に及びしゆへ、『其勢いに乗じて追打し、都に打入べし』と、江東郡大同川迄よせたるとの事也。承るに、大明勢百万騎と聞く。依ては爰にて戦ふ事あとふまじ。釜山浦の城に一旦引退き候はん」

といふ時に、三成、清正に向ひて、

「貴殿、彼所に到りて一合戦あるべしや」

といふ。清正、

「心得候なり。某、向候はゞ只一もみに明兵を追払ふべし」

迚、彼所に到りて見れば、十万計の軍兵、野に満、山にみちて軍勢ならぬ所もなく備へけり。主計頭は少しも臆する心なく、

「かよふの敵は力攻にはすべからず。只、謀事を以て一戦に打破るべし」

と、先、爰に陣をとつて居たりける。

此時に桂留主は清正の陣をぬけ出て江東郡に来り、麻貴が陣にいたり、対面なし、「生捕れしか共、漸々抜出て帰りし」と有し事共語りければ、麻貴将軍、大いに悦び、

「我々、此所に備へ候事は、今にも大明勢すくひに来らば、前後よりさしはさんで日本勢を攻討んに、壱人も生て帰る者有べからず。両皇子を取返す事は方寸にあり」

と申ければ、桂留主も悦び、

「然しながら和軍は偽りの謀事多く、油断し難し」

と、互いに軍儀をなしける。

扨、清正は敵の陣を見積り、「彼らが陣を破る事は夜討にあり」と、一つの謀事を案じ出し、多く藁にて人形をこしらへ、武具を着せて夜の間に川端に並べ、楯をつき、其間に雑兵を置、弓鉄炮を放させ、鉦太鼓をならさせ置、本部の人数を引連れて、川下十町余りへだて、敵陣の右の方へ出て、物静になし待居る其時に、

「川の正面の味方、攻懸る体をなすならば、敵は誠に寄来ると心得て、馳よらんとする間に、清正が旗本を本陣に切いり、牛の尾に火を付て陣中に追こむべし。敵は是が為に驚し所を、一度に切崩し打破らん」

と、其用意をなしけるに、此日は河霧夥敷たちて河合もしれざるは、「是、天の命ずる処なり」と川へ馬を馳入て、川下より渡しける。

扨、朝兵は此事を少しもしらず、「敵寄たりとても此大軍を見るならば、忽に見崩れして退くべし」と用心の体もなかりし処に、朝霧の中に数万の鬨の声をあげ、鉦太鼓を打ならし、川の向ふへよせたる体なれば、

「扨こそ倭兵よせたるぞや。定し川を渡してよせ来るべし」

と、

「壱人も残らず射落すべし」

とて、矢先を揃へて射たりける。日本勢は只楯の影に隠れて鉄炮を放し、鉦太鼓をならしけるゆへ、日本勢の川下を渡る事をば少しも心付ず。只、正面より向ふと計心得て、散々に射立けれ共、藁人形の奇兵なれば少しも恐る、事なし。はや、霧も少し晴かゝり行を見れば、川岸に日本勢の立並ぶ体見へければ、厳敷矢炮を飛し防ぎける処に、思ひもよらぬ朝兵の陣々、鬨の声聞へければ、「いかなる事ぞ」と驚、周章ける処に、数十疋の牛共、荒れにあれて朝兵の旗本へ乱れいりければ、「是は〳〵」とひしめく折から、南無妙法蓮花経の大旗を朝嵐にひらめかし、逞兵共無二無三に突懸りければ、何かわ以てたまるべき、我も〳〵と川中へ逃込むを、壱人も余さじと攻付ける程に、水に溺れて死する者、数をしらず。朝兵百万と聞へしも散々に乱れ立んとする時に、麻貴将軍は味方を励し、

「倭兵は小勢なり。取て返して戦へ」と、頻りに下知して、自ら鑓おつとり、十羅刹の荒たる如く、味方を進めて戦ふ所に、緋威の鎧に銀の長烏帽子の甲を着し、黒の駒の太く逞敷が尾髪ちゞみたるに貝鞍置て、片鎌の鎗を横たへ、

「日本無双と呼れし加藤主計頭清正、是にあり」
と大喝一声、おめいて麻貴を目懸て突懸る。麻貴も同敷、
「望む所の鬼将軍、ござんなれ」
と、馬を交へて二、三合戦ふと見へしが、清正は勇をふるつて鉄壁も通れと突出す鑓先に、麻貴、胸板をぐさと突れ引鑓に、馬より噇と落たりけり。清正が郎等、走り寄て首を取たり。此時、主計頭清正は大音に、
「朝鮮の惣大将、麻貴将軍を清正討取たり」
と呼はり〳〵、小高き岡に馬を乗上て、軍扇をひらき優々として居たりける。大将討れければ、朝兵は散々になる処を、「得たり、かしこし」と追打して、首数幾つといふ事なく討とりける。爰にて清正は馬よりおりて床机にかゝり、前に例の法花経の大籏を立て、祐筆後藤喜三郎をよんで首帳を記させ、感状数多かゝせて前に置たり。其文に、

今度江東郡にて、朝兵拾万余騎を切崩し、首数多得候事、比類なき働なり。帰朝後、主計頭証人為べきもの也。依而感状如件

月　日　　主計頭清正判

斯の如く認め置て、首を取来りし者に性名を書入与へし也。古今稀なる戦場なり。かよふの時には、「人に勝れし功をなして世にもしられ、子孫にも伝ふべき事なり」と、加藤清兵衛、同伝蔵、木村又蔵、斎藤立本、森本義大夫、飯田覚兵衛、津田与三郎、吉村吉右衛門、其外の郎等、我も〳〵と川中にて組打するもあり、岸にて打合もあつて、各、思ひ〳〵に働けり。既に総督麻貴は主計頭に討れたるを見て、後陣に扣へし四道将軍桂留主は敗軍に押立られ、川の西へと引退く。津田与三郎、目早く是を見付て、追欠来り、
「四道将軍と見しはひが目か。生捕りて命を助け置しに、其恩義を忘れて逃たるひけふ者、逃しはやらじ」
と声懸たり。桂留主も、「今は叶はぬ処なり」と取て返し、鉾を交じへて戦けるに、四道将軍の先将梅干秀といふ者、是を見て「主を助けん」と横合より津田に討て懸る。津田は馬を乗違へんとする時に、太腹を突れければ、馬ははね上るを乗直さんとする処を、たゝみかけ〳〵切付る故、既に危く見へし処へ、井上大九郎一さんに走り来りて梅干秀を只一鑓に突落しければ、不思儀に津田は助りける。飯田覚兵衛、吉村吉右衛門、四道将軍を目懸て相討にして、両人にて首を得たり。是を初として首共を清正の前に持行、彼の感状をうけておの〳〵悦びける。

扨、今日の勝利十分なれば、長追すべからずと、敵の兵粮を奪い、其外武具を得たる事限りなし。討取所の首数一万八千級とぞ聞へけり。是よりして朝兵は恐れをなして、あへて日本勢を犯すものなし。中にも加藤の蛇の目の紋を見ては舌を振いて隠れける。

然るに、浮田秀家、石田三成、小西行長等、大明和睦の事を談じければ、主計頭は心得ず、直に平安の城に帰りければ、秀家、三成を初として王城を陣払して、釜山の城へと集りける。然りといへ共、加藤主計頭計は元の儘に平安の城に威義厳然として居たりけり。然るに大明の皇帝より和将清正へ勅使来りければ、清正は『何事ならん』とふしんに思ひながら、勅使を城中に請じ入てうや〳〵敷もてなしける処に、明使静思官、大明帝の命を伝へて申けるは、
「抑、日本国は往古は我国の皇帝へ貢献の義あり。此故に七国の覇王たりしに、いつ頃よりしてか左様の事も絶てなし。然るに近年、関白秀吉の命として我国に随ふ処の朝鮮を犯しかすむる段、其意を得難し。是に依て、今渡海する処の日本勢を委く誅伐の為に、総督李如松に命じて七十万騎の兵を発し、遼東に差遣す処に、和勢小西行長を初めとして敗軍す。既に王城を散落し、釜山の城に集会す。今、李如松、釜山へ進むならば、行長等みな殺しにせん事、旦夕にあり。去ながら、主計頭事は朝鮮に入りより以来、猥りに殺伐を好まず、民百性を撫育し、朝鮮の両皇子を労りかしづく事、叡聞に達し、甚ゑいかん浅からず。依て今、両皇子を明朝に渡し、和睦するに於ては、一命を助け、朝鮮国に命じて清正が一手の勢おば送り舟にて滞なく日本の地へ届けん。若又、違背に及ばゞ、即時に数十万の兵を以て、先、清正を征伐して、長く朝鮮の愁を払はん。両条の勅答申べし」
と、威義を示して述たりけり。

清正大言勅答の事

幷　清正、亀の甲の攻具を作る事

勅使は大国の威を顕はして述ければ、主計頭も謹で是を承はり、

「大国の帝王より小国の倍臣たる主計頭清正が、少し計の仁慈を賞せられて一命を助けられんとの勅定、此身の幸ひ、日本の誉れ、いか計か有難き事なり。併しながら遼東の見苦敷敗軍は左も有べし。其子細は、行長は元日本泉州堺の町人にて、秀吉が普代にあらず。され共、宗対馬守が縁者といゝ、朝鮮の案内者たれば当手に向ひしか共、元町人ゆへ、大軍に恐れて逃走りたるなるべし。此清正は日本の関白秀吉が普代の臣たれば、何ぞ明兵の大軍を恐れんや。又、両皇子の事は一旦太閤に伺いて後に返し申さん共、其時宜によるべし。若、主計頭を責らるゝとて百万の兵を向らるゝ共、鳥嶺の難所に引受て、一日に十万宛は討殺し、十日の内にはみな殺になし、其勢いにて鴨緑江を打越て大明の都にいつて、帝おも両皇子の如くとりことなし、宮室を悉く焼払い野狐のすみかとなし申べし」と勅答の書を渡辺金太夫に認させて、「日本主計頭豊臣清正」と記し、判をすへて勅使を帰しける。誠に清正が大勇猛は大明にても舌を振いて恐れけり。

扨又、小西行長は太閤へさま〴〵と偽りを申かざりし書状、名古屋へ着せしかば、秀吉公も、「清正が生捕りし両皇子を返すべし」との御教書、平安に到来しければ、清正、本意なく思へ共、其意を得て朝鮮へ帰しけり。清正は何共合点行ず。され共、君命に随ひけるが、再び王城に来りければ、王城にては此度、木村常陸之助、長谷川藤五郎、加藤左馬助等、攻懸りし処の晋城強くして落難きよしを清正聞よりも、

「幸いの事なり。今、彼地に到り、攻落し、和談破れば幸なり」

と、黒田甲斐守を語らい、晋州へと向ひける。小西、浮田は此由を聞て、後陣に扣へける。清正は、我手勢を以て両日諸将に先達て晋州に到りける所に、誰いふとなく「城ははや明退きたり」とさたしける故、清正不思義に思ひ城下に到り見るに、いかにも城を開しと見得て敵の声もなし。され共、殺気りん〳〵と立昇れば、「是、開城せしに非ず。殺気、斯の如く昇る事、近頃心得ず」と、

「山に登り、城中のよふす伺い見るべし」

と下知して是を見せしに、いよ〳〵人なしといふ。清正いよ〳〵「心得難し」と

て進む事なく、「暫く待居べし」とて、備を堅めてありけるに、はたして寅の刻過る頃より、爰かしこに埋伏の兵、退窟して顕れ出、暫時に雲霞の如く成ければ、清正、

「扨こそ、我察せしに違はず。伏兵を観察する事、日中後に伏する者は平旦、寅に顕はるゝといふ事有。殺気の立しも尤なり」

とて、士卒にも物語り居ける処に、黒田甲斐守、壱万五千人を引卒して来り、清正と共に当城の丑寅の攻口にいたれば、浮田、小西は勢を一つになして、惣軍我も〳〵と取囲み、鉄炮を打懸、鬨を作り、数十万騎の日本勢、稲麻の如く打かこみたり。家々の旗差物は吉野、竜田の花紅葉の如く、鎗刀の光りは秋野の薄の穂の如く、鬨の声は坤軸も砕るとあやしまる。去れ共、城中、鳴りをしづめて物音せざりしが、はや日もてら〳〵と登る頃、俄に城中一声の鉄炮聞ゆるとひと敷、城兵共顕れ出、熱湯を永き柄杓にてそゝぎかけたり。城中人なしと思ひて、ひた〳〵と石垣に取付し事なれば、日本勢の先手、此湯をあびたる者、身体をそんじ、手先を爛かしけるゆへ、引退かんとすれ共、後陣もひし〳〵とせめ詰たる事故に引事もならず、うごめく所に、城中より精兵共顕れ出て、差つめ引つめ射かけしかば、日本勢いよ〳〵乱れ騒ぎて、味方の寄手、右往左往に散乱せり。日本勢は最初の城責を仕そんじ、熱湯の為に多くの士卒をそんじければ、再び押寄んと楯、竹策を厳敷用意し、熱湯のもれざる様になして、鬨を発し、我も〳〵と三方よりひし〳〵と城下に到りけるに、城中兼て用意なしたる投松明に火を付て炎々ともへ上りたるを投出しければ、寄手又是に辟易して散々に乱れける。

「中々此体にては急に攻懸り難し」と、いろ〳〵評議なしけるに、主計頭は我陣に有てとくと城の体を伺ひ居たりしが、寄手度々敗するを聞て、「中々容易の事にては落まじ」と工夫をこらし、牛の生皮をもつて亀の甲といふ物を拵させける。

爰にあつく紐を通し自由にする也。

鉄のてこにて石垣を崩す用意也。

斯の如くの形のものにて、毛の方を内にして生肉の付し方を表としける。斯て其用意調ひければ、大いに悦び、是をかつがせ城の石垣を砕き落す用意をなしける。尤、鉄てこにて砕事、工夫なり。先、其力士をゑらみける人々には、井上大九郎、吉村吉右衛門、森本義大夫、斎藤立本、飯田覚兵衛、加藤清兵衛、同じく伝蔵、赤星太郎兵衛等を初として、廿余人の者共に此亀の甲を着せてたゝかひを催しけり。

第三十

飯田覚兵衛、後藤又兵衛、城乗争論の事

幷　石田三成、清正を讒言の事

斯て日本勢、再三進みけるに、黒田甲斐守が郎等、後藤又兵衛基次といふ者、到つて奇謀の者なりしが、城中より投松明を以て味方をなやましけるを見て、『何卒、是を防ぎ、城中に乗入ん』と心を配りけれ共、すべきよふなく案じ居たりけり。

日本勢は城近くよれば熱湯の恐れあれば、只鬨の声を上る計なり。殊更、城の石垣高くして丈夫なり。落すべき術はなかりける。

時に主計頭清正が陣よりあやしきものを頭に頂き、廿余人顕れ出て、城の石垣近くすゝみよる。城中よりも是を見て、

「怪き形にて敵兵寄せ来るぞ。松明を投かけよ、〳〵」

と下知なして落し懸けれども、牛の生皮なれば火の付事なく、難なく石垣に近付、鉄てこを石の間にいれて、曳声を上てこぢける処に、さしもの大石壱つくつろぎければ、次第〳〵にゆるまり、ぐわら〳〵と落崩るゝにぞ、矢倉にひかへし兵共、肝をひやし逃迷ふ。此時、寄手は「すわや、乗入れ」と、我も〳〵と攻懸る。城中大いに騒ぎ立、上を下へと散乱し、爰を破られじと防ぎける。黒田甲斐守長政が陣より母里久七郎、「城乗は此時なるべし」と進みより、塀下に乗かけいらんとする。清正が兵は「着たる亀甲、もはや不用なり」と打捨〳〵、塀下より登りけるに、森本義大夫、飯田覚兵衛、木村又蔵、井上大九郎、斎藤立本、吉村吉右衛門、我も〳〵と進みけるに、「森本義大夫、一番乗」と呼はつて塀に手を懸、飛越んとしけるに、城中より打出す鉄炮にひざを打れ、横ざまに落たりける。然るに、「黒田が家来後藤又兵衛、母里久七郎、一番乗なり」と、塀に手を懸いらんとする時、誰とはしらず、又兵衛が上帯を摑んで引すへる拍子に、其身は飛越して、「一番乗、加藤清正が郎等飯田覚兵衛」と名乗ける。時に法花経の籏と蛇の目の籏を城中へ投こみければ、直に木村、井上も、我おとらじと乗入て散々に相戦ふ。是に依て城兵も爰を防ぐ事あたわず見へける処に、朝兵の内に万普といふ者、覚兵衛に渡り合、火花をちらし戦いしが、終に叶はず、万普は討れたり。斯て日本勢、我も〳〵と乗いりければ、城兵も爰をせんどゝ戦ふといへ共、防ぐ事あたわず。且亦、清正が勢は抜群の勇を顕はし、「今日、此城をせめ落さずはいつか落る期有べし」と、切いり突いりはせ廻りければ、城将牧素冠、「今は是迄なり」と、本丸より突出ける処を、日本勢、左右より追取こんで接戦なしけるにぞ、敵し難く、晋州の城忽ちに落にけり。

時に諸手の高名をしらべし処、「清正が郎等、飯田覚兵衛一番乗」といふ時に、「黒田が郎等、後藤又兵衛も一番乗」といゝて、双方まぎらはし。浮田秀家申されけるは、

「此事、双方吟味して、其上にて戦功を定むべし」

と、

「清正、長政、御両所共、御家来を召連申さるべし」

と也。長政は後藤又兵衛、清正は飯田覚兵衛を召連れて出られける。時に秀家、三成、始終を尋られし時に、清正が臣飯田覚兵衛、謹で、

「いさゝかの義、いかで争い申べき。当城の一番乗は森本義大夫なれ共、鉄炮にあたり、行歩叶はず。去によつて覚兵衛、後藤が上帯を引すへてはね上り、一番乗と名乗候事、明白なり。且、甲斐守殿にも城中にて飯田を御覧ありしなるべし。元来、城乗の義は籏小印をなげ入し者、全く一番なれば、争論の事はさる事ながら、荒まし斯の如し」

とて、後藤に向ひ、

「如何御聞ありしや」

といへば、又兵衛も、

「いかにも覚兵衛申通りに御座候」
とて、おとなしく一番乗は飯田に譲りけり。
扨、晋城は事なく落城に及びける。時に小西と沈惟敬との奸謀にて、大明国と日本との和親、相整ひければ、明兵、軍兵を引揚て退きければ、日本勢も釜山浦迄退きけれ共、清正は此所に止りて帰朝せず。然るに大明の冊使と朝鮮の両使を伴い、秀家、三成、行長は帰朝致しける。
私に曰、太閤は此已前、若君誕生の事を聞て帰国ありけるに、明国へ仰遣はされし難題の内に、「大明の皇帝とならん」と仰遣はされし事、調いければ和睦をなし給い、『今や大明の使来るや』と日をかぞへて待給いけるに、程なく浮田、石田等も帰朝し、言上に及びけるは、
「此度、朝鮮国にて、清正、おのれが勇武に漫じ、大明の勅使の返答に、小西行長をば町人の匹夫なりと申、且、君の御免しなきに、返翰に『豊臣の清正』としるしたる事、傍若無人のさた也」
と、石田三成しきりに讒言なしければ、殿下、大いに怒らせ給ひ、「清正が罪をきつと糺すべし」迚、其用意ある処に、大明の使者、朝鮮の使ともに来朝す。殿下、大いに悦び給い、諸将に命じて色々ともてなし給ひ、対面ある所に、大明の書翰には秀吉を日本国王に封じ、其文てい委く我国より和を乞求めし趣なれば、大いに怒らせ給い、早々、大明、朝鮮の使を追返し、終に和睦は破れけり。依て一旦事を収めて朝鮮の両皇子を返し給いしを悔給ふといへ共、今更せん方なし。
「此上は再び大軍を催し、大明も朝鮮も委く焼尽すべし」
と仰られけり。是等の事は『朝鮮征伐記』にくわしければ爰に略す。
斯て加藤清正は朝鮮国にあつて、我責取し城々を普請をなし居ける処に、日本国より早々帰朝すべき旨、急ぎの御下知なり。清正、大いに驚き、早束に朝鮮表を引払ひ、帰朝なし、先、本国熊本に着し、夫より大坂へ参着し、屋敷にいり登城せんとする時に、五奉行の面々より連書にて、
「清正事、いさゝか御不快の事、是有に付、登城の事扣へべし」
との事也ければ、主計頭、大いに驚き、
『主計頭、身にとつていさゝか御咎を蒙る覚なし。いかゞはせん』
と思ひわづらひ居られしが、先、その内々を聞んと密に思ふ計なり。

伏見大地震の事

幷　主計頭、誠忠を演る事

月明らかならんとすれば、浮雲、是を覆ふ。主計頭は讒言に依て疑を蒙りしが、清正、兼て増田右衛門尉長盛とは懇意なれば、かれに便りて事を伺はんと、かの家に到り、「某、朝鮮より帰朝せし」旨、且、「対面いたし度」旨を申入られしに、長盛、「内客有」とて、清正を書院に待せ置て後、奥へ請じ対面に及けり。此故に清正、心中に是を憤りいられける。扨、長盛に向ひ、
「某、帰朝せし処、いかゞの事にや、登城をも押留られ、御不審の旨仰出されたり。足下は数年の懇意なれば、其実否を語り聞せられ、宜敷申開の筋を頼入なり」
と申されける。右衛門尉申けるは、
「御不審の子細、委敷存ずべき事ならね共、貴将、兼て石田と不和より事趣ると存候。某は貴将と懇志なりといへ共、当時の出頭たる三成を差置て御取持をせん事はいかゞなれば、理をまげられて三成を御頼みあるべし。然る時には御身の為よかるべし」
といふに、清正、大いに怒りて、
「扨々、貴殿はいゝがひなき人也。我等五年が間、外国に居て、只今帰朝せしと申入たるに、自ら出迎ひもせず、あまつさへ是を待せ置、其上に三成を頼むべしとは何事ぞや。清正、たとへ此儘しばり首討るゝ共、三成と和睦せん事、思ひもよらず。貴殿も斯いゝがひなき人としらば、何しに交情せん。是、清正が本意に非ず。已来は御懇意申まじ」
と、席を蹴立て出ければ、長盛大いに制して、
「全く左様の事に非ず。我等、貴将の為に思ふが故なり」
と、さま〴〵宥めけれ共、いさゝか聞入ず、我屋敷に立帰り、昼夜寝食を忘れて案じ居ける。

頃は慶長元年七月十二日の夜、酉の刻頃より大地震にて御殿を始め、大坂伏見の町家も崩れける。其騒動大方ならず。時に、清正は郎等百人計り、鉄手こを持せて、其身は甲冑の上に帷子を着し、飛ぶが如くに城中へかけ入ける。此時、太閤秀吉公は御居間を出させ給いて、大庭に御出なされ、屏風にて囲ひ、大桃灯をともさせ、女廊まじりに淀殿、京極の君、政所等打まじりておはしける。腹心の諸侯数多ありといへ共、地震にや恐れけん、未だ壱人も登城するものなし。主計頭進み出て、大庭に到りけるに、此時、太閤は天守の石垣前におはせしを見るより大音にて、

「加藤主計頭清正、今晩の地震厳敷ゆへ、守護の為、是迄参着せり」

と申ければ、太閤も久々にて清正が声を聞し召、悦び給ふといへ共、御不審の旨、いまだ御糺明なきに依て、何共御意なし。時に清蔵比丘といへるが罷出、「早くも来らせ給ふもの哉」と取合ける。清正は此人に対して朝鮮五ヶ年困窮の事を咄し、且、数年の戦労を語り、落涙なしけるを、太閤もはるかに聞し召、古へ今の事を思いつゞけ給い、一向に清正が方を見やり給ふ頃しも、七月十二日の月明らかにして、清正が姿形ちもあらはに見ゆるに、数年の軍労に色もくろみ、痩おとろへたるを見玉ひ、涙を頻りに流させ給いける。政所はさま〴〵太閤へ清正が事を御わび有ければ、漸々御得心ありけるが、「肥後の国主たる主計頭清正程の者、奥向の御詫にて事済しとあらば、主計頭が為にも宜しからず。明日、五老の人々より御免の御沙汰有べき」との御事なりければ、清正は有難く涙にむせび、御屏風の方をふし拝み〳〵居たりける。地震もはや静りければ、主計頭には退去なし、「登城の用意あるべし」と、清蔵比丘を以て御内意ありければ、早束屋敷へ帰り、献上物の用意をなし、衣服を改めて待居し処に、徳川殿、前田利家より清正に登城致すべき旨申越れければ、清正用意をなして登城なしける。太閤は大広間に出御まし〳〵ける。時に徳川殿、御会釈ありて、主計頭御目見の旨言上ありければ、太閤仰られけるは、

「いかに清正、汝は幼年の砌より我猶子の如くになし養育せしなれ共、此度、外国においての一埒、免し難き事共あり、といへ共、徳川殿いろ〳〵と執成るゝに依て、勘気を免し遣し登城すべき旨申せし也。去ながら不審の条々申開致すべし。此度、朝鮮征伐の先手申付候は、其方と摂津守行長と両人なり。然る時は同じ大将の任たるに、何によりて行長をかるしめて『素性は町人なり』と大明の勅答に書しぞや。又、其返簡に、我ゆるしもなき豊臣の性を認めし事、不届の到り也。抑〻、此豊臣の性は忝くも源平藤橘等のこと〴〵く筋目なければ、免し難き事なり。既に秀長、秀康より外に免し申さず。右を猥りに認めし事、以の外の事なり。此義いかに」

と仰ければ、清正は頭を上て、徳川殿、利家に対して涙を流して申けるは、

「千辛万苦の功むなしく、いさゝかの事より御疑を蒙り罪せられん事こそ口惜き次第に候。御諚の如く、大明皇帝の勅書の返答に小西行長を遼東にてかよふ〳〵にて敗北せしと申事は、倭国を軽んじ恥かしめし詞なり。又、朝鮮の両王子を渡すべしと申越候故に、行長は素性いやしき町人なれば、軍法拙く明勢に追立られ敗北に及びたれ共、主計頭は豊臣家の先鋒の将にて、百万の勢向ふ共、少しも恐るゝ事なし。たとへ、今にも百万の勢いを向給ふ共、難所に支へて一日に十万づゝの勢を亡し、十日の内にはみな殺に仕らんと申遣候は、和朝の武威を以て大国の肝をとりひしがんと存、小西を町人なりと申せしは、清正が身を高ぶり、武勇を慢ずるには非ず。日本の武威、君の軍慮を轟かす為に申遣し候也。又、豊臣の性を書のせし事は、某、幼少の砌より中村より召連られ、御ひざ元に育てられ、恐れながら君をば親の如く存じ、且、其性は何と申にや、加藤と申名字を存たる計にて、其外の事は存ぜず。故に斯記せしなり。君にも御覚あらん。某、いまだしよぼ〳〵髪のむかし、『虎よ〳〵』と仰られつゝ、十三才の初陣に首をとつたりし時に、御涙を流させ給い、『光陰には関守なく、早、虎めがかゝる働せしこそうれしけれ。我は子と思ふなり。早く成長して能武士になれよ』と仰られし事は、数多の御感状よりも、四十万石を給はりし御墨付よりも有難く、夜の寝覚にも昼のうたた寝の間にも、此事を思ひ出し、『かゝる有難き君の方を跡にやせしか』と伏拝みし事は度々也。私事は骨髄にそみて忘れ申さゞるに、君にははやわすれ給ひしにや。三成が讒言に依て切腹に及ばんとせし事、是迄三度に及びし也」

と、鏡にひとしき両眼に涙を流したる有様は、恐ろしくも又殊勝也。太閤一々聞

し召、倶に涙を浮め給い、
「さて〳〵、能も忘れずにありしこそ誠なれ。今は疑ふ処なし。是迄は隠し置つるが、徳川殿も利家も聞給へ。かれは大政所の従弟子なり。幼年の昔より此事を申聞せざるは、勇猛の余り身をはたして、我名迄出す事あらんと、今日迄も口外に出ざりし也。今日、渠が誠忠を聞上は、大明への返答はよくも我心を察したる也。今日よりして豊臣の性(姓)を遣すまゝ名乗べし」
とありければ、清正は有難く御礼を申上、両卿へも御執成の事を厚く礼謝し、退出に及びける。
　扨、此後、清正に仰渡されて、朝鮮国への先鋒を仰付られたりければ、即時に用意して進発に及びけるが、此度の出陣は何となく心残りて進み難く思ひけり。むべなる哉。清正帰朝せざる内に太閤薨じさせ給いける。是ぞ主従一世の別れとは、後にぞ思ひしられけり。

後続清正実記巻之三拾　大尾